

兵庫県三木市所在

# 貝 谷 遺 跡

-山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXXVIII -

2002. 3

兵庫県教育委員会

兵庫県三木市所在

# かい たに 貝 谷 遺 跡

- 山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXXVIII -

2002. 3

兵庫県教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、三木市鳥町字貝谷に所在する貝谷遺跡の発掘調査報告書である。
  2. 発掘調査は、山陽自動車道（神戸ー三木）建設事業に関連するもので、日本道路公团大阪建設局の委託を受けて、平成6年度に兵庫県教育委員会が実施したものである。
  3. 出土品整理作業は、平成12・13年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
  4. 遺物写真撮影は、(株)谷口フォトに委託して実施した。
  5. 本書の執筆は、本文目次に記したとおり分担し、編集は岸野奈津子の補助をえて仁尾一人が行った。
  6. 本報告にかかる遺物・写真・図面は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。
  7. 現地調査および整理作業の際には、下記の方々のご援助・ご指導・ご教示を頂いた。記して深く感謝の意を表します。
- 毛利哲夫・松村正和・小網 豊（三木市教育委員会） 立花 聰（加西市教育委員会） 呂 智崇

## 凡　　例

1. 本書で示す標高値は、東京湾平均海水面（T.P.）を基とする。方位は座標北を指し、平面図に示した座標値は、平面直角座標V系原点からの距離である（単位はkm）。
2. 遺物には通し番号をつけている。また、遺物の番号は、本文・図版・写真図版ともに統一している。
3. 土器の断面は、弥生土器を黒塗りとした。
4. 土層などの色調については、小山田正忠・竹原秀雄著『新版 標準土色帖』1992年版を使用した。
5. 遺構名はアルファベットによる略号と2桁の数字で表記する。各遺構は地点ごと、地区ごとに01から始める。  
略号の意味は下記のとおりである。  
SX：土器棺墓・木棺墓 SK：土坑 SD：溝 P：柱穴



# 本文目次

第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	（長濱誠司） 1
第2節 確認調査の経過と体制	（長濱） 2
第3節 本発掘調査の経過と体制	（長濱） 4
1. 要要	
2. 本発掘調査の経過	
第4節 整理作業の経過と体制	（長濱） 6
第2章 第1地点の調査	
第1節 調査の概要	（仁尾一人） 9
第2節 遺構	（仁尾） 9
1. 土器棺墓および木棺墓	
2. 土坑	
3. 槽	
第3節 出土遺物	（仁尾） 16
1. 遺構出土遺物	
2. 包含層出土遺物	
3. その他の出土遺物	
第4節 小結	（仁尾） 20
第3章 第2地点の調査	
第1節 調査の概要	（仁尾） 21
第2節 遺構	（仁尾） 21
第3節 出土遺物	（仁尾） 22
第4節 小結	（仁尾） 22
第4章 第3地点の調査	
第1節 A地区の調査	（平田博幸） 23
1. 概要	
2. 平安時代前半の遺構	
第2節 B地区の調査	（平田） 24
1. 概要	
2. 弥生時代の遺構	
3. 平安時代前半の遺構	
第3節 出土遺物	（平田） 26
第4節 小結	（平田） 26
第5章まとめ	
第1節 第1地点の方形周溝墓について	（仁尾） 27
第2節 SD15出土の絵画土器について	（仁尾） 30
報告書抄録	32

## 表 目 次

第1表 貝谷遺跡 各地区的名称の変遷	7
第2表 貝谷遺跡 調査一覧表	8
第3表 第1地点 墓壙（土器棺墓）一覧表	10
第4表 第1地点 墓壙（木棺墓）一覧表（1）	12
第5表 第1地点 墓壙（木棺墓）一覧表（2）	13
第6表 第1地点 出土弥生土器観察表（1）	18
第7表 第1地点 出土弥生土器観察表（2）	19
第8表 第2地点 墓壙一覧表	21
第9表 第1地点 方形周溝墓分類表	27

## 挿 図 目 次

第1図 三木・小野I、Cに関連する調査箇所	1
第2図 貝谷遺跡 確認調査地点位置図	3
第3図 貝谷遺跡 本発掘調査地点位置図	5
第4図 第1地点 方形周溝墓平面図	29

## 図 版 目 次

図版1 第1地点 調査区遺構平面図	
図版2 第1地点 SX01 SX15	図版3 第1地点 SX09 SX32
図版4 第1地点 SX03 SX04	図版5 第1地点 SX07 SX08 SX10
図版6 第1地点 SX11 SX14	図版7 第1地点 SX12 SX19 SX22
図版8 第1地点 SX25 SX29	図版9 第1地点 SX33 SK07
図版10 第1地点 SK03 SK04 SK08	図版11 第1地点 SD13
図版12 第1地点 SD15	図版13 第1地点 SD16
図版14 第1地点 SD01. 08. 09. 10. 14. 17. 18. 23. 12	土層断面図
図版15 第2地点 調査区遺構平面図 / SX01 SX05 SX07	
図版16 第3地点 調査区遺構平面図	図版17 第3地点 SK01 SK02 SK03 SK04
図版18 第3地点 SK01 SK02 SK03 P01 P02	図版19 第3地点 SX01 SX02
図版20 第1地点 出土土器 SX15 SX15付近	図版21 第1地点 出土土器 SX32
図版22 第1地点 出土土器 SX09 SK04	図版23 第1地点 出土土器 SD15
図版24 第1地点 出土土器 SD01. 04. 07. 10. 11. 16. 19. 23	包含層(1)
図版25 第1地点 出土土器 包含層(2) SD19上層	
第2地点 出土土器 SX01 包含層	
図版26 第3地点 出土土器 B地区 SX02 SX01 SX03 A地区 SK01	

## 写真図版目次

写真図版 1 貝谷遺跡 全景（南から）	
貝谷遺跡 全景（西から）	
写真図版 2 第 1 地点	写真図版 3 第 1 地点
調査区全景（南から）	調査区南半部（北から）
調査区全景（東から）	調査区北半部（南から）
写真図版 4 第 1 地点	写真図版 5 第 1 地点
SX01およびSD01～03（北から）	SX05～08およびSD08・09（東から）
SX03・04およびSD07（南から）	SD13およびSD09～11（北西から）
SD07～11およびSX04（北から）	SX18～20・SK09～13 および SD16（南から）
写真図版 6 第 1 地点	写真図版 7 第 1 地点
SX09（西から）・（北から）	SX15（北から）
SX09（南西から）	SX15（南から）・（西から）
SX09（西から）・（西から）	SX32（西から）・（西から）
写真図版 8 第 1 地点	写真図版 9 第 1 地点
SX03（南から）	SX11（南から）
SX04（西から）	SX14（南から）
SX10（南から）	SX16（北から）
写真図版10 第 1 地点	写真図版11 第 1 地点
SX17（東から）	SX22（北から）
SX25（南から）	SX29（東から）
SX25（南から）	SX33（東から）
写真図版12 第 1 地点	写真図版13 第 1 地点
SK07（南から）	SD13全景（南から）
SK03土器出土状況・SK04土器出土状況 (南から) (南から)	SD13土器出土状況（東から） SD13土器出土状況（北から）
調査区全景（西から）	
写真図版14 第 1 地点	写真図版15 第 1 地点
SD15全景（西から）	SD16（南から）
SD15土器出土状況（南西から）	SD13土層断面・SD15土層断面 (南から) (東から)
SD15土器出土状況 (北西から)・(南東から)	SD16土層断面・SD12土層断面 (南から) (南から)
	調査状況（北西から）・（東から）

写真図版16	第2地点	写真図版17	第2地点
	調査区全景（南から）		SX01（南から）
	調査区全景（垂直写真）		SX02・03・07（西から）
	調査区東半部（北から）		SX05（南東から）・SX07（東から）
写真図版18	第3地点	写真図版19	第3地点
	第3地点全景（垂直写真）		焼土坑群（北から）
	第3地点全景（南から）		SK01（北から）・SK02（南から）
	第3地点A地区全景（北から）		SK01断面・SK02断面 (西から) (西から)
			SK03（北から）・SK04（北から）
			SK03断面・SK04断面 (西から) (西から)
写真図版20	第3地点	写真図版21	第3地点
	第3地点B地区全景（北から）		SX01完掘状況（西から）
	SX02検出状況・SX02完掘状況 (北から) (東から)		P02（南から）・P01（南から）
	SX01検出状況（南から）		SK03（北から）
写真図版22	第1地点 出土土器	写真図版23	第1地点 出土土器
写真図版24	第1地点 出土土器	写真図版25	第1地点 出土土器
写真図版26	第1地点 出土土器	写真図版27	第1地点 出土土器
写真図版28	第1地点 出土土器	写真図版29	第1地点 出土土器
写真図版30	第1地点 出土土器	写真図版31	第1地点 出土土器
写真図版32	第2地点 出土土器	写真図版33	第3地点 出土土器

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

山陽自動車道（高速自動車道 山陽自動車道吹田山口線）は、大阪府吹田市を起点とし、瀬戸内海沿岸の諸都市を結びながら、山口県山口市に至る総延長約434kmの高速道路である。このうち神戸ジャンクション（神戸市北区）～三木・小野インターチェンジ（三木市）間は、第9次施工区間として、昭和57年に整備計画が決定した。その後、昭和59年11月30日に施工命令が出され、昭和60年3月25日に路線発表が行われた。

事業区域内の埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、日本道路公团と兵庫県教育委員会で協議を重ね、昭和61年4月と昭和62年3月の2回にわたって分布調査を実施した。その結果、52箇所について確認調査の必要が認められた。この結果を受けて兵庫県教育委員会では平成元年度より確認調査を実施した。三木市鳥町字貝谷では、須恵器が採集されたNo.2・4地点、須恵器片が採集され、平坦な地形で、古墳の存在が予想されたNo.11地点、赤生土器が採集され、周知の遺跡である才神古墳群の範囲内の3地点が確認調査の対象となった。



第1図 三木・小野I.C.に関連する調査箇所

## 第2節 確認調査の経過と体制

山陽自動車道(神戸～三木)の確認調査は、主に平成元年度と2年度に実施したが、貝谷遺跡について、平成2年度、神戸～三木間36地点の調査の一環として実施した。この調査結果を受け、全面調査必要範囲を確定するために平成6年度に年ノ神遺跡などの全面調査と平行して追加の確認調査を実施した。当初、周知の遺跡の混乱から、低墳丘の古墳の検出につとめたが、調査の結果、予想しなかった弥生時代の墳墓群を検出することになった。以下、地点ごとの調査の概要を述べる。

### 第1地点

平成6年度(遺跡調査番号 940008)

調査期間 平成6年6月22日～7月8日

調査担当者 井守惣男 種定淳介 長濱誠司

調査面積 734m<sup>2</sup>

当初、才神古墳群として主に古墳の有無を確認するためトレントを16本設定し、調査を行った。

調査の結果、ほぼ今域で弥生時代の遺構・遺物が確認できた。検出した遺構から、弥生時代の墳墓群と予想され、ただちに全面調査に移行した。

### 第2地点

平成2年度(遺跡調査番号 900075・900077)

調査期間 平成2年10月12日～10月15日

調査担当者 大平 茂 山上雅弘

調査面積 15m<sup>2</sup>

No.2地点として調査を行った。トレントを1本(延長10m)設定し、調査した。調査の結果、遺物が出土したもの、遺構は検出できず、隣接地に遺跡の所在する可能性を指摘するにとどまった。

調査期間 平成2年10月12日～10月17日

調査担当者 大平 茂 山上雅弘

調査面積 111m<sup>2</sup>

No.4地点として調査を行った。トレントを2本(延長60m)設定し、調査した。調査の結果、遺物が出土したもの、遺構は検出できなかった。

平成6年度(遺跡調査番号 940186)

調査期間 平成6年7月1日～7月13日

調査担当者 井守惣男 種定淳介 長濱誠司

調査面積 294m<sup>2</sup>

平成2年度の確認調査成果に基づき、尾根上にトレント5本(延長150m)を設定し、調査を行った。調査の結果、弥生時代の土器棺の一部を検出した。確認調査終了後、全面調査に移行した。

### 第3地点

平成2年度(遺跡調査番号 900078)



第2図 貝谷遺跡 確認調査地点位置図

調査期間 平成2年10月24日～11月8日

調査担当者 大平 茂 山上雅弘

調査面積 632m<sup>2</sup>

No.11地点として調査を行った。尾根上平坦面にトレンチを23本設定して調査した。調査の結果、散漫ながらも遺構が検出され、遺物の集中する箇所が確認された。

平成6年度（遺跡調査番号 940007）

調査期間 平成6年6月13日～9月9日

調査担当者 井守徳男 種定淳介 平田博幸 長濱誠司

調査面積 2050m<sup>2</sup>

平成2年度の確認調査成果に基づき、遺跡の有無と範囲を確認するため、尾根上にトレンチ59本（延長1025m）を設定し、調査した。調査の結果、弥生時代の土器棺、古墳時代以降の土坑などを検出し、尾根上のはば全域に遺跡が広がることが判明した。確認調査終了後、ただちに全面調査に移行した。

### 第3節 本発掘調査の経過と体制

#### 1. 概要

今回の調査対象である貝谷遺跡は、丘陵から南に延びる尾根3本に分かれ、前記分布調査結果のNo.2・4・11地点の3箇所を含む。前節のとおり、平成2・6年度に行った確認調査の結果、弥生時代の埴輪などを検出し、合計5700m<sup>2</sup>に及ぶ全面調査が必要と判断された。これらの確認調査の結果をもとに行われた県教育委員会と日本道路公団大阪建設局との協議結果をふまえ、平成6年度に全面調査を実施した。

神戸ジャンクション～三木・小野インターチェンジ間は、平成8年度開通が確定している。この区間の発掘調査は平成6年度内にすべて終える必要があり、特に貝谷遺跡は三木・小野インターチェンジにあたり、調査の遅延はできないため、公団との協議を重ね、詳細なタイムスケジュールで調査に望んだ。全面調査は、日本道路公団大阪建設局からの依頼（第3地点：平成6年3月31日付 大建総管第150号、第1・2地点：平成6年8月17日付 大建総管第337号）に基づくものである。日本道路公団との契約は、第3地点は確認調査および年ノ神遺跡の全面調査などと一緒に「北山古墳群他」で、第1・2地点は大二遺跡の全面調査を含め「貝谷遺跡他」で行った。

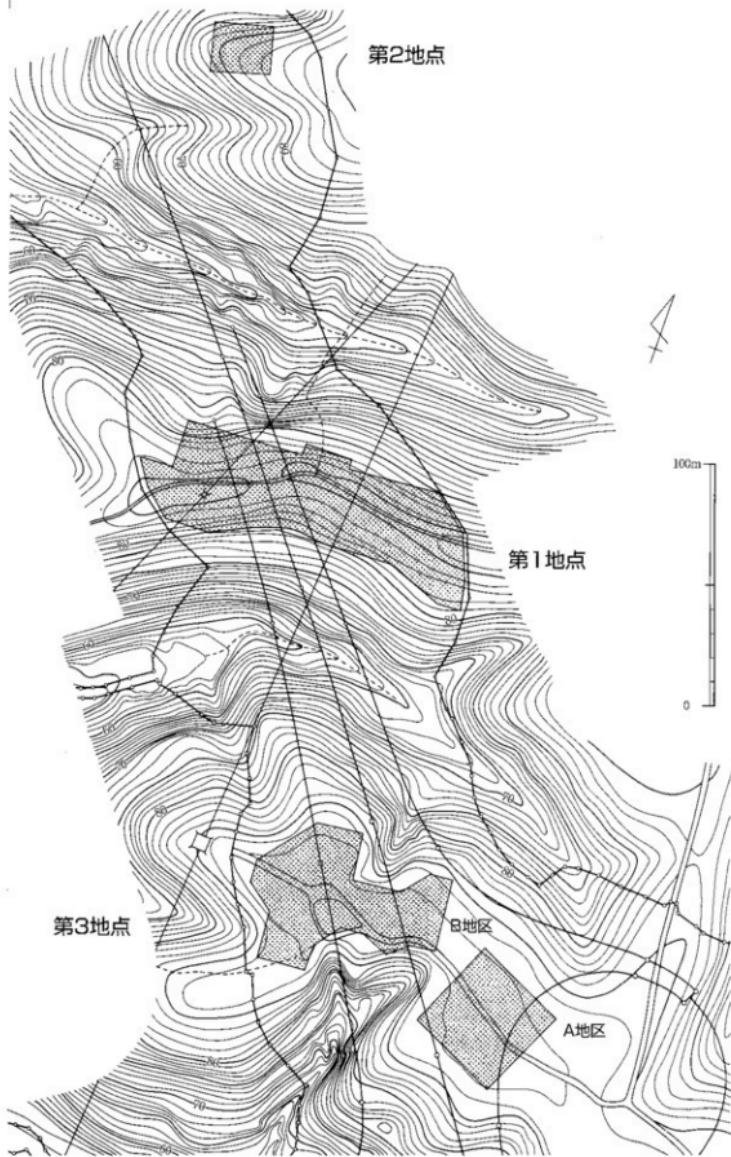
調査にあたっては、県教育委員会が主体となり、発掘調査については、貝谷遺跡第1・2地点および第3地点とともに株式会社森本組と、空中写真撮影については日本工事測量株式会社と委託契約を締結して実施した。

なお、貝谷遺跡は、分布調査時から遺跡名が再三変更しているため、その対照表を文末（第1表）に記す。

調査体制は以下のとおりである。

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長 池水義輝



第3図 貝谷遺跡 本発掘調査地点位置図

副所長 渡邊 清(事務担当)  
三木正剛(技術担当)

主任調査専門員 大村敬通

総務課 課長 石井 守  
主 壱 津守芳輝

企画調整班

調査専門員 池田正男  
主 壱 水口富夫

調査第3班

調査専門員 井守徳男

調査担当 第1・2地点

調査第3班

主 壱 森内秀造  
技術職員 井本有二 仁尾一人

調査補助員 中北敦子

現場事務員 佐藤朋子

室内作業員 霜島昌子 富永浩子 舟坂好子

第3地点

調査第3班

調査専門員 井守徳男  
主 壱 種定淳介 平田博幸

技術職員 長濱誠司

調査補助員 進藤眞己子 将積伸一郎

現場事務員 大田八重子

室内作業員 五百萬道代

## 2. 本発掘調査の経過

調査にあたっては、まず機械により表土を除去し、その後人力により、遺物包含層の掘削、遺構の検出を行った。遺構検出後は、写真撮影、実測により諸記録の作成を行った。すべての遺構を検出した後、ヘリコプターによる航空写真撮影を1回実施した。

各地点の調査期間、調査面積は文末（第2表）に記す。

## 第4節 整理作業の経過と体制

遺物の整理にあたっては、発掘調査時に監督員詰所において土器の洗浄、ネーミングを実施することから開始した。本格的な整理作業は、第1～3地点一括して平成12年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に搬入し、平成12・13年度の2カ年で整理作業を行った。

平成12年度

出土土器の接合・補強を行い、実測すべき遺物をピックアップした。土器は実測した後、復元し、写真撮影を行った。

**整理担当職員 整理普及班**

主 任 深江英憲

調査第1班

主 査 平田博幸

調査第3班

主 査 森内秀造

主 任 長濱誠司

調査第4班

技術職員 仁尾一人

**整理技術嘱託員**

香川フジ子 岸野奈津子 木村淑子 前田千栄子 鈴木まき子

今村聰美 八木富美子 河上智晴 早川有紀 藤井光代 岡田祥子

三島重美 友久伸子

平成13年度

造構・遺物図版のトレース、レイアウト、原稿執筆から報告書刊行までの作業を行った。

**整理担当職員 整理普及班**

主 任 深江英憲

調査第1班

主 査 平田博幸

調査第2班

主 査 森内秀造

主 任 長濱誠司

調査第3班

技術職員 仁尾一人

**整理技術嘱託員**

香川フジ子 岸野奈津子

第1表 貝谷遺跡 各地区的名称の変遷

	第1地点	第2地点	第3地点
分布調査(昭和61年度)		山陽自動車道 (神戸～三木)	山陽自動車道 (神戸～三木)
確認調査(平成2年度)		No. 2・4地点	No.11地点
確認調査(平成6年度)	才神古墳群		
本発掘調査(平成6年度)	貝谷遺跡 第1地点	貝谷遺跡 第2地点	貝谷古墳群
本報告書(平成13年度)	同 上	同 上	貝谷遺跡 第3地点

第2表 貝谷遺跡 調査一覧表

地点名	遺跡調査番号	所 在 地	調 査 期 間	調査面積
第1地点	940240	三木市鳥町字貝谷876-48他	平成6年10月11日～ 平成7年1月26日	4,425m <sup>2</sup>
第2地点	940241	同 字貝谷876-8	平成6年11月8日～ 平成6年12月16日	500m <sup>2</sup>
第3地点	940226	同 字貝谷876-72他	平成6年10月24日～ 平成7年1月5日	4,400m <sup>2</sup>

## 第2章 第1地点の調査

### 第1節 調査の概要

貝谷遺跡は、三木市の西方、加古川の支流である美嚢川やその流域が眺望できる南向きの尾根上に立地している。遺跡は、3本の尾根上に分かれて所在することから、東から第3地点、第1地点、第2地点と呼称し、調査を実施した。

調査の契機となった山陽自動車道は、三木市の山間部を東西に貫いていくが、貝谷遺跡周辺では、三木市街地の西側を南北に通る国道175号線から三木・小野インターチェンジへと接続する広い範囲に工事が及んでいる。このため、銅鏡や玉類とともに短甲などが出土した年ノ神6号墳や、貝谷遺跡と時期的に重複する年ノ神遺跡などの遺跡が発見、調査されている。

第1地点は、標高およそ85mを測り、現在の鳥町の集落との比高差はおよそ40mである。調査地は、インターチェンジから本線部分に合流する西側の地点に位置しており、東西約30m、南北約150mのおよそ4,500m<sup>2</sup>におよぶ範囲に、弥生時代中期後半から中期末にかけての墳墓群が発見された。遺跡が広がる比較的平坦な尾根筋は調査区の南北両側へも展開しており、また、確認された遺構も南北の調査区外へさらに続いていることから、この尾根筋一帯にかけて墳墓群が形成され、その一部を調査したものと考えられる。

### 第2節 遺構

第1地点では、土器棺墓および木棺墓（ともにSX）、土坑（SK）、溝（SD）などの遺構を発見した。南北に長い調査区の中央を弓状に尾根の後線（平坦地）が伸びており、遺構はその平坦地に沿ってほぼ全域から発見された。以下、調査区はSD12・13以南を調査区南側、SD17以北を調査区北側、その間を調査区中央部と便宜的に呼称し、記述をすすめる。

#### 1. 土器棺墓および木棺墓（SX）

4基の土器棺墓と31基の木棺墓を発見した。

土器棺墓は、調査区の南側に1基（SX01）、中央部に2基（SX09・15）、北側に1基（SX32）確認された。このうち、尾根の平坦地から若干傾斜した地点より発見されたSX09・15の残存状態は良好であったが、尾根の最高地点（平坦地）より発見されたSX01・32は、上部が破損しており、下方部のわずかが残存している状態であった。

##### SX01（図版2）

調査区南側の尾根の平坦地に立地しており、長径約0.5m、短径約0.3mを測る楕円形の浅い土壙状の遺構に、破損した壺形上器が横たえた状態で検出された。土器は破損と摩滅が著しく、図化することはできなかつたが、土器の出土状況や、遺構の出土位置などから土器棺墓と考えられる。

棺内および掘方から遺物は出土しなかつた。

##### SX09（図版3）

調査区の中央部、尾根の平坦地から西側へ緩く傾斜する地点より発見された。確認調査の時点では発見された遺構であるが、長径約0.6m、短径約0.4mを測る楕円形の掘方は、土器を検出し終えてのちの断

ち割り調査によって確認することができた。土器の周開および周辺一帯には、直径5~10cm程の円礫が多数みられた。調査区内では、地山中にそれらの円礫が包含されているが、SX09の周開には集中してみられ、また、土器を固定するようにその形状に沿って認められる礫も確認されることから、それらが意図的に敷かれていた可能性も考えられる。棺身として用いられた土器は壺形土器であり、やや大きめの礫（約15cm×10cm）が口縁部を塞ぐように入れられており、蓋の役割をしていたものと考えられる。土器は、口縁部より底部がわずかに上がり、地表面からはおよそ30°の傾きをもって据えられていた。

棺内および棺方内から遺物は出土しなかった。

#### SX15（図版2）

SX09同様、調査区の中央部、尾根の平坦地から西側へ傾斜し始めた地点より発見された。後述する木棺墓（SX14）を切り込んで、長径約0.7m、短径約0.5mの重な円形を呈する掘方の中に壺形土器が納められていた。ほぼ垂直に掘り込まれた掘方は、深さ約0.4mを測り、土器の残存状況は良好であった。但し、土器の体部から口縁部にかけては一部破損しており、破損した口縁部とともに高杯部が出土した。高杯部は、壺形土器の口径よりもわずかに大きく、棺蓋として用いられていたものと考えられる。また、壺形土器の口縁部は一部破損しているが、打ち欠かれたものではなく、後世の削平あるいは土圧によって破損したものと考えられる。壺形土器は底部と体部がほぼ水平になるように25°前後の傾きをもって据えられており、底部には穿孔が認められる。

棺方内からは、棺蓋に転用された高杯の他に、こぶし大の石が1石出土しているが、棺内から遺物は出土しなかった。なお、棺内に残存する土壤の分析により、遺体を埋納していた痕跡の確認を検討したが、良好な資料が得られないため、実施できなかった。

#### SX32（図版3）

調査区北側の標高85.0mを測る尾根の平坦地より、破損した壺形土器が発見された。土器は直径約1.0m、レンズ状の断面形を呈する浅い円形の土壤に横たえられた状態で確認された。土器の出土状況や遺構の出土地点などSX01と類似しており、土器棺墓と考えられる。円形の土壤は、土器棺墓の掘方と考えられるが、尾根に平行する3本の溝（SD19~21）のうち、西側の溝（SD21）と匁形を呈する尾根に直行する溝（SD22）に一部切り込まれており、また、出土した土器の上半部も後世の削平によつて、著しく破損していた。

棺内からは、高杯部が出土した。高杯は、復元した壺形土器の口縁部よりひと回り小さいが、棺蓋に利用されたものと考えられる。

第3表 第1地点 墓壙（土器棺墓）一覧表

番号 (SX)	現存墓壙（土器棺墓）			主軸	標高
	長径	短径	深さ		
01	(0.50)	(0.29)	(0.10)	N80°E	84.7
09	0.58	(0.40)	0.34	N95°E	83.8
15	0.67	0.52	0.42	N69°E	84.3
32	0.96	(0.80)	0.25	N104°E	85.0

( ) は復元値 / 単位 m

木棺墓は、調査区全域にわたって確認されており、31基を数える。そのほとんどは、主軸（短辺の中心を通る線）が尾根にはば直交する東西方向を向いている。また、土器棺墓同様、尾根の平坦地に分布するもの（以下、平坦地）と東西両側に若干傾斜していく地点に分布するもの（以下、東・西傾斜地）とに大別される。ここでは、それぞれの遺構の数値などについては、別表（第4・5表）に記載してい

るため、特徴的な13基について記述する。

#### SX03 (図版4)

調査区南側の平坦地に立地しており、長さ1.98m、幅1.06m、北東部がわずかに膨らむほぼ長方形の墓壙と考えられる。深さ0.45mを残すが、木棺の痕跡は確認されなかった。

墓壙内から遺物は出土しなかった。

#### SX04 (図版4)

調査区南側の平坦地に立地しており、SX03の北、約9mの地点より検出された木棺墓である。長さ1.90m、幅1.02mを測る墓壙は、南長辺がわずかに膨らむ長方形を呈し、深さ0.63mが残存していた。墓壙の北側寄りには、長さ1.5m、幅0.48m、深さ約0.3mを測る木棺の痕跡が確認された。木棺は、墓壙からおよそ0.25m下層より検出され、幅は底辺では0.3mと上面より約0.1m短いため、土圧によって内側へ押されている可能性が考えられる。墓壙内は、床面に明褐色土(11層)を敷き詰め、木棺を掘えたのち、掘り下げられた地山土(8~10層)が埋め戻されている。

遺物は、墓壙の中央部上層(1層)より壺形土器片が出土した。第1地点の木棺墓より出土した唯一の遺物であるが、著しい摩滅と体部の破片のため、同化することはできなかった。棺上に副葬されていたものが落ち込んだものと考えられる。

#### SX07・08 (図版5)

調査区南側の西傾斜地に2基並んで発見された。後述する尾根に平行する溝(SD08)の西下方には、SX07・08の南にさらに2基(SX05・06)の木棺墓が確認されており、南からSX05・06・07・08と呼称した。SX07は、長さ0.88m、幅0.40mを測る長方形を呈している。深さ0.14mを残すが、木棺の痕跡は確認されず、西下がりの地形にあわせて床面は緩く傾斜している。

SX08は、長さ0.94m、幅0.40m、深さ0.16mを測る長方形を呈し、SX07と同様に木棺の痕跡は確認されなかった。

2基ともに、墓壙内から遺物は出土しなかった。

#### SX10 (図版5)

調査区の中央部、平坦地に立地している。北側と東側は、後述するそれぞれ尾根に直交する溝(SD15)と尾根に平行する溝(SD14)によって「字形に区画されている。墓壙は、西側の立ち上がりが削平によってわずか0.05mが残存しているに過ぎないが、長さ1.99m、幅0.84mを測る長方形を呈している。墓壙の中央西側寄りには、長さ1.65m、幅0.42mを測る木棺の痕跡が確認された。墓壙中央部から東側では、0.16mの深さを残すが、後世かなりの削平をうけているものと考えられる。

棺内および墓壙内から遺物は出土しなかった。

#### SX11・12 (図版6・7)

調査区の中央部、西斜面地に2基並んで発見された。比較的緩やかな傾斜地には、この他、木棺墓2基(SX13・14)と土器棺1基(SX15)が近接して確認されている。南に位置するSX11は、長さ1.78m、幅0.44mを測る細長い長方形を呈している。東側では深さ0.3m、西側(谷側)で深さ0.2mが残存しているが、木棺の痕跡は確認されず、西下がりの地形にあわせて床面はわずかに傾斜している。

SX11に北接するSX12は、長さ1.19m、幅0.55mを測る長方形を呈している。深さは東側では0.23m、西側(谷側)では0.12mが残存しているが、木棺の痕跡は確認されなかった。

2基ともに墓壙内から遺物は出土しなかった。

#### SX14 (図版 6)

調査区の中央部、平坦地と西斜面地の傾斜変換点に立地している。北西角部は、土器棺墓 (SX15) の掘方に切り込まれているが、墓壙は長さ2.08m、幅1.16mを測る長方形を呈している。墓壙の横断面は、他の木棺墓がほぼ垂直に立ち上がっているのに対し、東西両側ともに緩く立ち上がっており、床面は西側におよそ20°傾いている。また、主軸は他の多くの木棺墓とは異なり、南北方向である。

墓壙内から遺物は出土しなかった。

#### SX19 (図版 7)

調査区中央部の平坦地には3基の木棺墓 (SX18~20) と5基の土坑 (SK09~13) が集中して立地しており、近接する東斜面地にも2基の木棺墓 (SX16・17) が確認されている。このうち、SX19は、長さ1.14m、西側幅0.57m、東側幅0.38mを測る台形状の平面形を呈している。深さは西側では0.16mを残すが、東側ではわずか0.06mが残っているのみであり、木棺の痕跡は確認されなかった。

墓壙内から遺物は出土しなかった。

#### SX22 (図版 7)

調査区北側の東斜面地には、5基の木棺墓 (SX22~24・28・29) が発見されており、そのうち4基の木棺墓 (SX22・23・28・29) は、ほぼ同じ大きさ (およそ2×0.8m) で等間隔に確認された。SX22は4基のうち一番南に位置し、長さ2.08m、西側幅0.69m、東側幅0.60mを測り、短辺がともに弧を描く平面形を呈している。東西両側の短辺には楕円形を呈する小口穴が確認されており、西側の小口は0.68m×0.38m、東側の小口は0.59m×0.42mをそれぞれ測る。深さは西側の小口では0.5m、東側では0.16mが検出面より残存している。

墓壙内から遺物は出土しなかった。

#### SX25 (図版 8)

調査区北側の平坦地に立地し、長さ2.42m、幅1.04mを測る若干歪な長方形を呈する墓壙が発見された。墓壙の中央およびやや北寄りには、長辺に沿って5~10cm程の縁が直線的に並んでおり、それらの縁に沿った形で長さ2.06m、幅0.52mを測る木棺の痕跡が確認された。木棺の東西両側の短辺には、楕円形の小口穴が確認されており、西側の小口は0.48m×0.17m、東側の小口は0.51m×0.25mをそれぞれ測る。棺部分では0.07m、西側の小口部分では0.21m、東側で0.26mがそれぞれ検出面より残存している。

棺内および墓壙内から遺物は出土しなかった。

第4表 第1地点 墓壙 (木棺墓) 一覧表(1)

番号 (SX)	現存墓壙 (木棺墓)			主軸	標高
	長さ	幅	深さ		
03	1.98	1.06	0.45	N77° E	84.6
04	1.90	1.02	0.63	N66° E	84.6
07	0.88	0.40	0.14	N73° E	83.6
08	0.94	0.40	0.16	N61° E	83.6
10	1.99	0.84	0.17	N90° E	84.8
11	1.78	0.44	0.30	N90° E	84.2
12	1.19	0.55	0.23	N85° E	84.3
14	2.08	1.16	0.22	N0° E	84.5
19	1.14	0.52	0.20	N102° E	85.0
22	2.08	0.66	0.16	N86° E	84.4
25	2.42	1.04	0.12	N103° E	84.9
29	2.52	0.92	0.24	N106° E	84.4
33	2.15	0.74	0.41	N96° E	84.5

( ) は復元値 / 単位 m

## SX29 (図版8)

調査区北側の東斜面に立地している。前述した4基の木棺墓 (SX22・23・28・29) のうち一番北に位置し、墓壙は長さ2.52m、幅0.92mを測る長方形を呈している。墓壙中央には、東罐の立ち上がりは削平により消滅しているが、長さおよそ2m、幅0.54mを測る木棺の痕跡が確認された。墓壙中央部から西側では、深さ0.25mが残存している。

棺内および墓壙内から遺物は出土しなかった。

## SX33 (図版9)

調査区北側の平坦地に立地し、長さ2.15m、西側幅0.58m、東側幅0.74mを測る台形状の平面形を呈する墓壙が発見された。墓壙中央には、長さ約1.8m、幅0.44mを測る木棺の痕跡が確認され、中央より西側では深さ約0.4mが残存している。

棺内および墓壙内から遺物は出土しなかった。

第5表 第1地点 墓壙（木棺墓）一覧表(2)

番号 (SX)	現存墓壙（木棺墓）			主軸	標高	備考 (立地・木棺痕跡の有無 他)
	長さ	幅	深さ			
02	1.12	0.66	0.22	N79° E	84.5	北側平坦地 木棺痕跡無し
05	1.30	0.58	0.17	N75° E	83.6	北側西斜面地 木棺痕跡無し
06	1.26	0.72	0.17	N80° E	83.6	北側西斜面地 木棺痕跡無し
13	(1.04)	0.36	0.18	N50° E	83.2	中央部西斜面地 木棺痕跡無し 北東一部削平
16	2.26	0.84	0.36	N103° E	84.0	中央部東斜面地 木棺痕跡無し
17	2.28	0.92	0.29	N100° E	84.0	中央部東斜面地 木棺痕跡無し
18	1.04	0.77	0.30	N94° E	84.9	中央部平坦地 木棺痕跡無し
20	1.20	0.60	0.23	N93° E	84.9	中央部平坦地 木棺痕跡無し
21	1.33	0.58	0.17	N 3° W	84.6	中央部平坦地 木棺痕跡無し
23	2.20	0.68	0.30	N96° E	84.6	南側東傾斜変換点 木棺痕跡無し
24	1.38	0.40	0.21	N88° E	84.3	南側東傾斜変換点 木棺痕跡無し
26	1.74	0.82	0.21	N68° E	83.6	南側西斜面地 木棺痕跡無し
27	1.22	0.82	0.26	N 5° E	83.8	南側西斜面地 木棺痕跡無し
28	(1.40)	0.82	0.17	N98° E	84.4	南側東斜面地 木棺痕跡無し 東側一部削平
30	1.04	0.54	0.28	N104° E	84.7	南側平坦地 木棺痕跡無し
31	(1.00)	0.78	0.32	N38° E	84.4	南側東傾斜変換点 木棺痕跡無し 南西一部削平
34	1.58	0.88	0.28	N56° E	84.5	南側東傾斜変換点 木棺痕跡無し
35	(1.98)	0.64	0.20	N92° E	84.6	南側平坦地 木棺痕跡無し 北西一部調査区外

( ) は復元値 / 単位 m

## 2. 土坑（SK）

調査区全域より土坑18基を発見した。

調査区南側に8基、中央部に6基、北側に4基確認された土坑は、尾根の平坦地あるいは東西両側の傾斜地より発見された。木棺墓の形状が概ね長方形を呈し、垂直に掘り込まれているのに対し、土坑の平面形は不整形な円形あるいは四角形を呈し、断面の形状も緩い曲線を描いている。ここでは、特徴的な4基の土坑について記述する。

### SK03（図版10）

調査区北側の西斜面地に立地している。東西約1.7m、南北約2.8mを測る長方形を呈し、東側ではおよそ0.2mが残存している。

中央西側より壺の体部片が出土したが、摩滅と小破片のため、図化することはできなかった。

### SK04（図版10）

調査区北側の平坦地と東斜面地との傾斜変換点に立地し、平面形はおよそ2m四方の歪な隅丸方形を呈している。中央部では深さ0.32mが残存し、上下2層に堆積している。

下層上面より壺形土器（8）の小破片が出土し、口縁部から体部にかけての1／4が復元された。

### SK07（図版9）

調査区北側の東斜面に立地している。土坑は東西0.60m、南北1.16mを測る長方形を呈し、西および南辺の立ち上がりでは酸化した明赤褐色層が検出された。土坑内には、10~20cm程の礫が暗赤褐色土（4層）上面から数多く出土し、それらの隙間に骨の小片が発見された。骨は残存状態が悪く、詳細は不明である。

土坑内から遺物は出土しなかったため、時期およびその詳細は不明である。

### SK08（図版10）

調査区北側の平坦地に立地している。平面形は東西約1.2m、南北約0.9mを測る楕円形を呈しており、深さ約0.2mが残存している。

土坑内から遺物は出土しなかった。

## 3. 溝（SD）

調査区全域より溝23条を発見した。

溝は、①調査区の西斜面地に位置するもの（SD12）と尾根の平坦地に位置するもの（SD12以外の溝）、②尾根に平行するもの（SD14・16他）と尾根に直交するもの（SD15・17他）、③平面の形状が棒状のもの（SD14・15他）とそれ以外の形状を呈するもの（SD01・13他）などに分類される。ここでは、溝内より遺物が出土したものを中心に、その他に特徴的な溝について記述する。

### SD13（図版11）

調査区南側の平坦地に立地している。他の確認された溝の平面形がほとんど棒状を呈しているのに対し、SD13は北東角部が一部途切れているが、凹辺がほぼ長方形に巡っている。周溝の内外辺（墳丘側およびその反対側）ともに直線的な線は描かれず、波をうったような不整形な線で検出された。凹辺とも断面形は逆台形あるいはそれに近い形状を呈し、埋土は2層からなる。周溝の延長は約31m、幅は最大約1.8m、最小約0.5m、深さは約0.2mを測る。周溝内は東西約5.5m、南北約10mの長方形の平面を呈するが、盛土あるいは埋葬施設（以下、木棺墓）は検出されなかった。

遺物は、東周溝の北端部より壺形土器・壺などが出土したが、いずれも小破片のため固化できなかった。

#### SD15（図版12）

調査区中央の平坦地に立地し、尾根に直交して確認された。長さ約6.5m、幅約1.2m、深さ約0.2mを測り、平面形は棒状を呈している。南東には尾根に平行してSD14（長さ約10m、幅約1.2m、深さ約0.2m）が立地しており、2本の溝で「」形に区画される。区画された東西約7m、南北10mの長方形を呈する平坦地では、盛土は確認されなかつたが、木棺墓1基（SX10）が検出された。

溝内のはば全域より遺物が出土しており、固化できたものは、10点（9～18）を数える。このうち、(18)にはシカの絵画が線刻されていた。

#### SD16（図版13）

調査区中央部の半平坦地と西斜面地との傾斜変換点に立地している。尾根に平行して、長さ約15m、最大幅約1.8m、最小幅約0.9m、深さ約0.2mを測る棒状の平面形を呈する溝である。北東には尾根に直交してSD17（長さ約7m、幅約1.2m、深さ約0.2m）が立地し、2本の溝で「」形に区画される。区画された平坦地は、東西約9m、南北約14.5mの長方形を呈し、南端より木棺墓3基（SX18～20）、土坑5基（SK09～13）が検出された。

遺物は、溝の北端と中央部の2ヶ所から出土した。壺形土器・壺などであるが、いずれも小破片のため、固化できたものは3点（26～28）である。

#### その他の溝

SD01 調査区南端の平坦地に立地している。尾根に直交する東西方向の部分から東側では南北へ、西側では南側へ派生する歪な平面形を呈している。東西方向に約10m、東側の南北方向は約5mが確認されているが、南側の調査区外へさらにならびて伸びている。断面形は逆台形に近い形状を呈し、埋土は2層からなる。

溝内から遺物は出土しなかつた。

SD07～09 調査区中央部の平坦地に立地し、尾根に平行して3本の溝が確認された。SD07とSD09は同一の溝の可能性も考えられるが、SD07は長さ約3.5m、SD09は長さ約7.5mを測り、ともに幅は1m前後である。SD09の北東には尾根に直交してSD11（長さ約4.5m、幅約1m、深さ約0.2m）が、約5m東側には歪な「」形を呈するSD10（東西約5.5m、南北約4m、最大幅1.3m、最小幅0.5m、深さ約0.2m）がそれぞれ位置し、それらの溝で区画された平坦地には、木棺墓が1基（SX04）検出された。また、SD08はSD07・09からおよそ0.5m西下方に位置しており、長さ約4.5m、幅約0.7mを測る。SD08で区画された西下方では、4基の木棺墓（SX05～08）が検出された。

いずれの溝内からも遺物は出土しなかつた。

SD12 調査区南側の標高約78～85mの西斜面地に立地している。長さ約32m、幅約3m、深さ1m前後を測り、平面形は若干弧を描く棒状を呈している。立地あるいはその大きさなど他の溝とは異なり、流路と考えられる。

溝内から遺物は出土しなかつた。

SD19～22 調査区北側の平坦地に立地している。等間隔に3本の溝が尾根に平行して確認され、東から順にSD19・20・21と呼称した。SD19は長さ約8.5m、幅約0.6m、深さ約0.2m、SD20は長さ約6.5m、幅約1m、深さ約0.2mをそれぞれ測る。また、SD21は長さ約4.5m、幅約0.6m、深さ約0.2mを測り、北東には尾根に直交するSD22が位置している。SD22は、長さ約2.3m、幅約0.8m、深さ約0.2mを測り、土器棺墓（SX32）の掘方を一部切り込んでいる。

SD19の上層から須恵器の壺(48)と土師器の小皿(49)が出土したが、他の溝内から遺物は出土しなかった。

### 第3節 出土遺物

第1地点の調査で出土した遺物は、弥生土器が大半を占め、コンテナ25箱(セキスイ TS28)を数える。そのうち、図化できたものは49点(弥生土器47点、須恵器1点、土師器1点)である。以下、遺構出土遺物(1~30)および包含層出土遺物(31~47)、その他の出土遺物(48・49)として、それぞれ記述をすすめていきたい。なお、弥生土器については、壺形土器・甕・高杯・鉢等に分類した。さらに壺形土器は、口縁部の形態によって受口壺・広口壺・直口壺・短頸壺・細頸壺・無頸壺と細分しており、文末にその特徴を記している。また、弥生土器個々の計測値などは一覧表(第6・7表)に記載している。

#### 1. 遺構出土遺物

SX15(1・2)およびその付近(3・4) 土器棺墓の棺身と考えられる受口壺(2)とその棺蓋として利用されていたと考えられる高杯(1)が出土した。(1)の口縁部は、内側を巡る断面方形の内面突帯より低く水平に伸び、細く垂下する。内面にはよこ方向の、外面上にはたて方向のヘラミガキが残る。(2)はほぼ完存しており、口縁部はわずかに屈曲する受口状を呈し、4条の凹線文が施されている。頭部には櫛目状の突帯が巡り、体部外面上方には斜め方向のハケメを下方にはたて方向のミガキが施されている。内面には指頭圧痕が明瞭に残り、底部に穿孔が認められる。

SX15付近からは2点の高杯(3・4)が出土している。ともに脚部ではなく、杯部のみであるが、明瞭な屈曲部をもち、口縁は外上方に伸びる。

SX32(5・6) 土器棺墓の棺身と考えられる壺形土器(6)とその棺蓋として利用されていたと考えられる高杯(5)が出土した。(5)は浅い皿状の杯部に明瞭な屈曲部をもち、口縁部は外上方に伸びる。(6)は頸部に突帯が巡り、体部外面上方には斜め方向のハケメが、下方にも斜め方向のハケメおよびミガキが施されている。頭部上方の大部分は欠損しており、ともに出土した口縁部の小片から広口壺と判断される。口縁部をあわせた復元高はおよそ63cmを測り、底部には穿孔が認められる。

SX09(7) 土器棺墓の棺身として利用されていたと考えられる直口壺(7)が出土した。埋納されていた上部(体部の約1/3)は欠損しているが、ほぼ全体の形状が復元された。口縁部は凹線文が4条施され、頸部には指頭圧痕による貼付突帯が巡っている。頭部は短く垂直に立ち上がり、体部はほぼ球形を呈している。

SK04(8) 筒状の頸部から大きく開く口縁部をもつ広口壺(8)が出土した。頸部には、たて方向のハケメと4条の凹線文が施されている。残存する体部外面は摩滅が著しく、調整の痕跡は不明瞭である。体部下方および底部は欠損しているが、復元高はおよそ68cmを測る。

SD15(9~18) 溝内のほぼ全面に散乱した状態で土器が出土した。そのうち、図化できたものはほぼ完形の短頸壺2点(15・16)と甕1点(17)、壺形土器、甕などの破片6点(9~14)、シカの絵が線刻された壺形土器の体部1点(18)の計10点である。(9)と(10)は同一個体と考えられる広口壺の口縁部と体部である。9条の擬円線文上に8本を1単位とした棒状浮文が飾られた垂下する口縁部(9)は、その内面にも棒円形浮文を貼り付け、細紐孔が穿たれている。直線文と波状文を交互に配し、円形浮文が飾られ

た(10)は、内外面ともにナデの痕跡が残っている。(11)はほぼ垂直に立ち上がる頸部に間隔をおきながら4条の凹線文が施され、内外面ともナデの痕跡が残っている。(12)は、5条の凹線文が巡るあるいは鉢と思われる口縁部の小破片であり、(13)は穿孔が認められる甕の底部である。(15)は口縁が上下に肥厚し、櫛指波状文が施された面をもつ短頸甕である。算盤玉形に突出した体部上方には、直線文と波状文が交互に描かれ、下方にはたて方向のヘラミガキの痕跡が明瞭に残っている。口縁は下方に肥厚し、頸部に3条の凹線文が施された(16)は、底部は欠損しているが算盤玉形の体部上方には列点文、下方にヘラミガキの痕跡がみられる。(14)と(17)は、「く」の字に外反する口縁部をもつ甕である。(18)は、体部外面に線刻されたシカが描かれており（詳細は第5章 第2節「SD15出土の絵画土器について」に記載）、外面にはハケメの痕跡が残っている。

その他(19~30) いずれも溝内から出土したもので、壺形土器7点、甕3点、高杯、鉢の計12点（第6・7表）を図化することができた。このうち、(21)は3条の凹線文を施された細長い筒状の頸部と算盤玉形の体部に脚台が付く細頸甕である。(22)は椀状の杯部をもつ小型の高杯であり、(25)は緩く弧を描いた体部から外反する口縁をもつ鉢である。

## 2. 包含層出土遺物

包含層(31~47) 包含層出土遺物の17点は、調査区中央部のSD15を中心にして、その南から出土したもの(32・34・37・41・42・44)と北から出土したもの(31・33・39)、その他の地域から出土したもの(35・36・38・40・43・45~47)に分類される。内訳は壺形土器9点、甕6点、高杯1点であり、(36)を除いていずれも小破片である。壺形土器は遺構出土のものと同様に、口縁部の形態から直口あるいは広口のものが多いが、無頸甕(40)が1点出土している。「ハ」の字に聞く体部上方がわずかに残存する(40)は、4条の凹線文が施されている。甕は「く」の字に外反する口縁をもち、ほぼ完全に復元された(36)の体部上方にはハケメが、下方にはたて方向のヘラミガキの痕跡がそれぞれ残っている。高杯は遺構出土のものが杯部のみであったのに対し、包含層出土の2点(37・47)はとともに脚部である。「ハ」の字状に聞く脚部には、たて方向のミガキが施され、(47)の下方には凹線状のくぼみが巡っている。

## 3. その他の出土遺物

SD19上層(48・49) SD19検出中に出土した須恵器甕(48)と土師器小皿(49)である。SD19は他の溝と同様に木棺墓を区画する弥生時代の溝と考えられるが、上記2点の土器が出土した。

### 壺形土器の口縁部の特徴による分類

- 受口甕 口縁部がわずかに受口状を呈するもの (2)
- 広口甕 筒状の頸部をもち、口縁部へ大きく外反するもの (6・8他)
- 直口甕 直行する頸部をもつもの (7・11他)
- 短頸甕 短い頸部をもち、算盤玉形の体部をもつもの (15・16他)
- 細頸甕 直行する細い頸部をもつもの (21)
- 無頸甕 胴部から直線的に口縁部に至るもの (40)

第6表 第1地点 出土弥生土器観察表(1)

報告番号	出土地点	器種	法量/cm				残存率	備考
			口径	器高	腹径	底径		
1	SX15	高杯	19.0	[8.8]			杯部約3/4残存 脚部欠損	
2		受口壺	22.2	59.5	40.6	10.5	ほぼ完形	底部穿孔有り
3	SX15付近	高杯	(16.6)	[3.8]			口縁部破片	
4		高杯	(24.2)	[7.9]			杯部約1/3残存	
5	SX32	高杯	(21.8)	[4.7]			杯部約1/2残存 脚部欠損	
6		広口壺	(28.8)	(63.0)	(41.6)	(8.3)	口縁部約1/9残存 その他約1/2残存	底部穿孔有り
7	SX09	直口壺	11.9	38.5	(30.7)	9.4	体部約1/3欠損	
8	SK04	広口壺	(34.4)	(68.0)	(45.6)		口縁部および体部の約1/4残存	
9	SD15	広口壺	(23.3)	[4.3]			口縁部約1/8残存	10の口縁部か
10		広口壺		[13.0]	(35.0)		体部上半部約1/2残存	9の胴部か
11		直口壺	(11.2)	[5.5]			口縁部約1/3残存	
12		壺か	(11.6)	[4.0]			口縁部約1/5残存	
13		壺		[7.4]		5.9	底部のみ残存	底部穿孔有り
14		壺	(17.6)	[3.4]			口縁部約1/6残存	
15		短頸壺	12.6	17.6	18.9	5.9	約2/3残存	底部穿孔有り
16		短頸壺	17.2	[27.4]	(26.8)		約2/3残存 底部欠損	
17		壺	19.6	28.3	28.7	(6.4)	口縁部および体部の約2/3残存	
18		壺		[25.0]	(49.2)		体部約1/4残存	絵画(シカ)土器
19	SD01	壺		[4.4]		7.6	底部約3/4残存	底部穿孔有り
20	SD04	壺	(16.9)	[3.5]			口縁部約1/8残存	
21	SD07	脚付細頸壺	6.7	(29.8)	(16.0)	(9.4)	約2/3残存	
22		高杯	9.7	11.6		5.5	約2/3残存	杯部穿孔有り
23	SD10	壺		[3.2]			体部破片	
24		壺	(19.8)	[3.9]			口縁部約1/5残存	

( ) は復元値 [ ] は現存値 / 単位 m

第7表 第1地点 出土弥生土器觀察表(2)

報告番号	出土地点	器種	法量/cm				残存率	備考
			口径	器高	腹径	底径		
25	SD11	鉢	(13.6)	[7.1]	(11.8)		口縁部および体部の約1/6残存	
26	SD16	直口壺	(15.3)	[7.8]			口縁部約1/4残存	
27		広口壺	(11.9)	[3.7]			口縁部約1/2残存	
28		広口壺	(18.6)	[4.5]			口縁部約1/6残存	
29	SD19	広口壺	(15.0)	[3.5]			口縁部約1/8残存	
30	SD23	壺		[20.8]	(13.6)	(6.6)	体部約1/8および底部約1/3残存	
31		直口壺	(18.3)	[9.4]			口縁部約1/3残存	
32		直口壺	(8.6)	[5.3]			口縁部約1/4残存	
33		壺		[10.6]			体部上半部の約1/6残存	
34		壺		[2.9]		5.8	底部のみ残存	底部穿孔有り
35		広口壺	(13.9)	[4.7]			口縁部約1/4残存	
36		壺	(15.9)	(35.4)	(25.6)	7.2	約1/3残存	底部穿孔有り
37		高杯		[16.4]		(15.9)	脚部約1/2残存 杯部欠損	
38		直口壺	(11.0)	[8.4]			口縁部約1/2残存	
39		広口壺	(19.6)	[6.3]			口縁部約1/5残存	
40	包含層	無頸壺	(15.9)	[8.5]			口縁部約1/6残存	
41		広口壺	(17.6)	[3.1]			口縁部約1/4残存	
42		壺		[9.1]		6.1	体部下半部の約1/4および底部残存	
43		壺		[10.1]		5.9	体部下半部および底部約2/3残存	底部穿孔有り
44		壺		[4.0]		(5.0)	底部約1/3残存	
45		壺		[15.5]		10.2	体部下半部および底部残存	底部穿孔有り
46		壺	(13.9)	[5.8]	(15.2)		口縁部約1/5残存	
47		高杯		[12.0]		(15.9)	脚部約1/3残存 杯部欠損	

( ) は復元値 [ ] は現存値 / 単位 m

## 第4節 小結

今回の調査では、南北に長い調査区のほぼ全域から前述した土器棺墓および木棺墓（SX）、土坑（SK）、溝（SD）などの遺構が検出された。木棺墓は、溝によって区画されいくつかの平面内に位置し、変則的な方形周溝墓を形成しているもののが存在する。それらについては、第5章　まとめ「第1地点の方形周溝墓について」において、溝の形状およびそれにともなう周溝墓の分類・規定などとして記載するが、尾根の稜線上に12の方形周溝墓に区画することができる。この他にも調査区内には木棺墓が点在しているため、より細分類することも可能であると思われる。

第1地点から出土した遺物は、弥生時代中期後半から中期末にかけての壺形土器や甕が大半を占め、検出された遺構の所属時期を示すものと考えられる。そのうち、土器棺墓（SX09・15・32）の棺身および棺蓋として利用された壺形土器（2・6・7）や高杯（1・5）、溝（SD15）内から一括出土したシカが線刻された土器片（18）を含め短頸甕（15・16）や広口甕（9・10）、甕（17）などは、比較的その形状や文様、調整痕などが良好に残っている。また、図化した小破片からも形状が復元されるものや文様などの痕跡が残っているもののが存在するため、これらの土器から特に壺形土器に注目し、いくつかの特徴を挙げておきたい。第1地点出土の壺形土器は、口縁の形状から6種類に分類され、ほぼ全個体の頭部には凹線文が巡っている。その他には、貼付突帯や波状文などの文様が施されているものや、播磨地域に特徴的な円形浮文を装飾するものなどが出土している。但し、良好な一括資料は少なく、個々の遺構ごとに細分することは不可能である。また、線刻されたシカの絵画土器については、第5章　まとめ「SD15出土の絵画土器について」において記載する。

現在の鳥町の集落および美濃川流域を一望できる第1地点において、弥生時代の限られた期間に尾根筋一帯に墳墓群が形成されていたことが判明した。尾根を隔てた約0.5km東には、同じく山陽自動車道建設にともない調査された年ノ神遺跡が立地している。年ノ神遺跡は第1地点と周期的に重複する集落遺跡であるが、第1地点に墳墓群を形成した母集落は広く眼下にその存在が知られている鳥町遺跡であったと考えられる。鳥町遺跡は、現在の集落が立地する段丘上や丘陵裾部の緩斜面地に弥生土器が散布しており、時期的あるいは立地的な要件などから、平地の集落遺跡（=鳥町遺跡）とその背後丘陵上の墳墓群（=貝谷遺跡）としての有機的な関連が想定される。なお、第1地点が立地する尾根筋は調査区も含めて南北方向に約300mの平坦地が続いており、墳墓群はこの全域に広がっていると考えられる。このため、山陽自動車道はそのほぼ真ん中を東西に貫いているが、調査区の南北両側に続く平坦地は破壊をまぬがれ、墳墓群のおよそ半分近い範囲は現状のまま残されている。

## 第3章 第2地点の調査

### 第1節 調査の概要

第2地点は、貝谷遺跡の3地点のうち、最も西の尾根筋に位置し、標高はおよそ82mを測る。尾根上の平坦地に造構が点在し、調査された第1・3地点とは異なり、第2地点は平坦地から南へ緩く傾斜し始めた地点に立地している。調査は東西20m、南北25mにおよぶ500m<sup>2</sup>が対象範囲であり、第1地点同様、弥生時代中期後半以降の土器棺墓や木棺墓が発見された。尾根上に展開する比較的平坦な地形は、今回の調査区のさらに北側に広く続いており、第2地点では墳墓群の南端のわずか一部分を調査したものと考えられる。

### 第2節 遺構

第2地点では、土器棺墓および木棺墓（ともにSX）などの遺構を発見した。南へ緩く傾斜する調査区のほぼ中央に尾根の稜線が延びており、造構はその稜線上および東斜面地より確認された。

#### 土器棺墓および木棺墓（SX）

土器棺墓1基と木棺墓6基を発見した。

土器棺墓は、調査区南端の東斜面地に1基（SX01）発見された。また、木棺墓は調査区北側の東斜面地に一部切り合うものを含め4基（SX02～04・SX07）、南側の尾根の稜線上に2基（SX05・06）の計6基が発見された。ここでは、それぞれの遺構の数値などについては、別表（第8表）に記載しているため、特徴的なものについて記述する。

##### SX01（図版15）

調査区南端の東斜面地に立地しており、今回発見された遺構の中で最も低い地点に位置している。直径約0.4mを測る円形を呈する土壇に、壺（51）の底部が正位の状態で検出された。土壇の断面は、土器の形状に沿って緩く立ち上がり、深さ約0.2mが残存している。土器棺墓と判断したが、第1地点で検出された土器棺墓が尾根の平坦地あるいは傾斜変換点に立地し、壺形土器を横たえた状態で埋納していることから、出土地点や出土状況など異なる点が多くみられる。

棺内および掘方から遺物は出土しなかった。

##### SX05（図版15）

調査区南側の尾根の稜線上に立地しており、2基（SX05・06）の木棺墓が近接して検出された。SX05は南辺

第8表 第2地点 墓壙一覧表

番号 (SX)	現存墓壙（土器棺墓）			主軸	標高
	長径	短径	深さ		
01	0.42	0.40	0.19	N 0° E	79.6
番号 (SX)	現存墓壙（木棺墓）			主軸	標高
	長さ	幅	深さ		
02	1.56	0.70	0.19	N36° E	80.7
03	1.86	0.76	0.14	N96° E	81.0
04	1.50	0.77	0.12	N 6° E	82.1
05	(1.60)	0.60	0.15	N139° E	80.8
06	1.98	0.54	0.16	N98° E	80.7
07	1.23	0.65	0.28	N76° E	81.3

（ ）は復元値 / 単位 m

(谷側)の立ち上がりが削平によって失われていたが、墓壙は長さ約1.6m、幅0.60mを測る長方形を呈している。墓壙のほぼ中央には長さ1.33m、幅0.41mを測る木棺の痕跡が確認された。南辺の立ち上がりはわずか0.04mであるが、北辺では約0.15mが残存していた。

棺内および墓壙内から遺物は出土しなかった。

#### SX07 (図版15)

調査区北側の東斜面地に立地しており、後述する2基(SX02・03)の木棺墓に北接して検出された。墓壙は長さ1.23m、幅0.65mを測る長方形を呈しており、西辺では深さ0.28mが残存している。墓壙のほぼ中央には長さ0.99m、幅0.44mを測る木棺の痕跡が確認された。

棺内および墓壙内から遺物は出土しなかった。

**SX02・03** 調査区北側の東斜面地に立地している。切り合い関係をもつて2基(SX02・03)の木棺墓が検出され、近接してさらに2基(SX04・SX07)が位置している。SX03は東辺がSX02に切り込まれているが、長さ1.86m、幅0.76mを測る長方形を呈する墓壙に長さ1.55m、幅0.50mの木棺の痕跡が確認された。深さは北辺(山側)では0.14mが残存していたが、南辺(谷側)ではわずか0.06mが残るのみであった。SX02は長さ1.56m、幅0.70mを測る長方形を呈する墓壙に長さ1.49m、幅0.42mの木棺の痕跡が確認された。SX03同様に、山側(西辺)は深さ0.20m前後が残存していたが、谷側(東辺)ではわずか0.04mが残るのみであった。

2基ともに棺内および墓壙内から遺物は出土しなかった。

### 第3節 出土遺物

第2地点から出土した遺物は、コンテナ1箱(セキスイ TS28)に過ぎず、そのうち、図化できたものはわずか2点である。

(51)は土器棺墓(SX01)の棺身と考えられる壺の底部である。体部の内外面とともに摩滅によって調整の痕跡は不明瞭であるが、外面にミガキの痕跡がわずかに残り、底部には穿孔が認められる。(50)は包含層より出土した高杯の杯部である。口縁端部に凹線文が巡る浅い椭形の杯部には、外面に指頭圧痕およびナデの痕跡が残っている。

### 第4節 小結

今回の調査では、弥生時代の木棺墓を中心とした墳墓群の一部が発見された。検出された6基の木棺墓については、主軸(窓辺の中心を通る線)の方向が一定ではなく、第1地点ではみられなかった木棺墓の切り合いも確認された。しかし、後世の削平により遺構の残存状況は決して良好とはいせず、出土遺物も少量であった。尾根の平坦地を調査した第1地点と比較すると第2地点は、尾根から南向きに傾斜する地点にあたり、立地の点で大きな違いがみられる。第2地点において南向きの斜面地に遺構が確認されたことから、北側に展開する尾根の平坦地にも第1地点と同様に弥生時代の墳墓群が存在する可能性が高く、また、第1地点の遺構も調査対象範囲外である南向きの斜面地まで広がっていることが想定される。第1・2両地点の尾根筋に存在する弥生時代の墳墓群は、一部が調査され、その成果が判明するとともに、破壊をまぬがれた部分も多く、後世に残されることとなった。

## 第4章 第3地点の調査

### 第1節 A地区の調査

#### 1. 概要

調査区は、完成した山陽自動車道三木・小野I.Cの北西尾根部に相当する。地形的には東の山頂稜線から美義川に向かって伸びる東西方向の尾根稜線上にあり、海拔90m前後を測る。頂部は尾根先端部に向かって僅かに傾斜する程度の比較的幅の広い平坦な地形であり、先端部からはかなり急峻な斜面となって平野部につながる。この山頂平坦部のほぼ全域を調査対象範囲としたが、その中央部で斜面の両側から小さな谷が入り込んでくるため、調査区は瓢箪形の形状を呈することとなる。このうち、方形の平面形となる北側の約1,600m<sup>2</sup>がA地区である。

遺構内からはまったく遺物は出土していないが、同様の遺構がひろがるB地区の状況から判断して、平安時代前半に属する遺構群と考えられる。

#### 2. 平安時代前半の遺構

この時期の遺構には、坑底に灰と炭が薄く堆積する土坑が4基ある。坑内からは、本時期を示す須恵器の破片が少量出土している。この十坑以外に、時期を明確に示す遺構を検出することはできていない。

##### (1) 土坑

平面形は隅円方形と不定円形のものがみられ、調査区の中央やや南西部に集中する状態にある。

###### SK01 (図版17)

形状・規模 平面形は一辺約1.3mの隅円方形を呈する。深さは20cmを測り、壁面は斜めに立ち上がり、平底の形状となる。壁面の一部は火を受けているために赤色に変色する。

埋土 坑底にはほぼ一面に薄い炭化物層（炭層の可能性もある）が堆積し、その上層は微量の炭・焼土を含んだ自然堆積のシルト質土～細砂で充填される。

出土遺物 遺物はまったく出土していない。

###### SK02 (図版17)

形状・規模 不正形の円形平面を呈し、長径約1.1m、短径約1m、深さ約20cmを測る。断面は皿形となり、底部は比較的平坦な形状を呈する。

埋土 坑底の一部に炭化物（炭か）が残存するものの、ほぼシルト質～細砂の自然堆積土により一気に埋められている。

出土遺物 遺物はまったく出土していない。

###### SK03 (図版17)

形状・規模 SK01同様、隅円不正方形の平面形態を呈する。掘り込みの形状もSK01と同じように、壁面は斜めに開き、底部は平底となる。深さはやや浅くなり10cm程度となる。

埋土 焼土・炭等の堆積は全くなく、シルト質～細砂の自然堆積による埋土によって埋められる。

出土遺物 遺物はまったく出土していない。

###### SK04 (図版17)

形状・規模 SK02の形態に近く、平面形は不正形の円形となる。深さは約10cmと浅く、壁面は斜め

に立ち上がり、底部は小さな平底となる。

埋土 坑底一面に炭化物層（炭層か）が比較的厚く堆積する。

出土遺物 遺物はまったく出土していない。

## (2) 不定形土坑

調査区のはば全域で多数を検出しているが、分布的にはSK01～04の土坑群の存在する箇所を中心として、その東側と西側に密集する傾向を見て取れる。

形状・規模 平面形はまさに不定形であるが、傾向的には椭円形・不正円形を基本としているようである。最大長約6m、最大幅約2m、深さ約50cmの舟底形の底部を呈するものを最大規模とする。

埋土 土坑内はいずれも淡灰色のシルト質土一細砂の埋土で埋められる。

出土遺物 遺物はまったく出土していない。

## 第2節 B地区の調査

### 1. 概要

調査区はA地区の南西側に続き、一連の尾根の先端側にある。調査区からは、眼下に美義川とその流域平野部・三木市街地を遠望できるとともに、北方には加古川本流域の平野部も垣間見ることができる。約2,800m<sup>2</sup>の広さとなる調査区は不定多角形であり、南北方向の延長約80m、最大幅約60m、最小幅約20mを測る。尾根先端側は、若干その斜面部分も調査範囲としている。

A地区同様、調査区の余域で不定形の土坑状造構を多数検出するとともに、尾根先端部に近い箇所で平安時代前半のピットと弥生時代中期後半の墓跡を検出した。

### 2. 弥生時代の遺構

調査区の南東部に、木棺墓(SX01)と土器棺墓(SX02)を各1基づつ確認している。これらの遺構は、尾根の先端部がさらに小さく枝分かれする分岐部分に存在する。調査区はここで切れるものの、地形的にみるとこの小さな支尾根の先端部に向かって墓域として利用されていたものと推定される。

#### SX01 (図版19)

形状・規模 弥生時代中期末～後期にかけての木棺墓である。長さ約1.1m、幅約40cmを測る兩円長方形掘方の長辺は、北東～南西の方向を取る。その北東小口は直線に、南西は山形状の形態となり、約20cmの深さを残す。その中に納まる木棺は、長さ約65cm、幅約20cmと非常に小型であり、掘方の東側に片寄って配置されている。ただし、幅に関しては土圧により内側へ迫り込んだ可能性を考える必要があるかと思われる。棺内への副葬はまったく行われていない。

埋土 墓壙内の埋め戻しには、掘り上げられた地山土を用いる。棺内埋土は、暗灰黄色細砂となる。

出土遺物 北長側板側には棺外遺物として壺が1点副葬されている。

#### SX02 (図版19)

形状・規模 弥生時代中期末頃の土器棺である。掘方を明確に捉えることができなかつたことから判断して、ほとんど土器と同じ大きさに穿たれていたものと思われる。棺として用いられた土器は壺形土器であり、底部と体部がほぼ水平になるように、2度前後の傾きを持って横たえられているが、上半部は後世の削平のために消失する。ただ、内部に口縁部の部材が落ち込んで出土していることから、口縁部を打ち欠かないまま棺身として用いていたことが知れるが、蓋の形態については判断の材料がない。

口縁部を北西方向に向けて設置されている。

埋土 棚内はにぶい黄橙色の細砂が流入している。

出土遺物 棚内からの遺物の出土はまったくない。

### 3. 平安時代前半の遺構

明確に本時期に属する遺構は、遺物の出土しているP1・P2・SK03のみであるが、遺構内埋土の状態等から判断して、検出されたその他の不定形土坑の多くも本時期に属するものと判断される。

#### (1) ピット

調査区の中央やや西側に近接して、2カ所確認している。

P1 (図版18)

形状・規模 約20cmの円形平面を呈する。深さは約5cmと非常に浅いため、上部の大半が後世に削平されたものと思われる。底部には川原石とともに、須恵器の破片が多数散かれている。

埋土 遺構の深度が非常に浅いために、詳細に観察することができなかった。

出土遺物 須恵器壺の破片が多数出土したが、体部のため固化し得ていない。

P2 (図版18)

形状・規模 長径約30cm、短径約20cmの楕円形平面となる。深度もP1と同様非常に浅く、細長い川原石1点とともに須恵器の破片が含まれていた。

埋土 遺構の残存状況が良好でないため、詳細な検討はできなかった。

出土遺物 須恵器壺体部の破片が少量出土したが、小片のため固化していない。

#### (2) 土坑

調査区北側の西寄りに、1基を確認した。

SK03 (図版18)

形状・規模 南北方向に長い楕円形平面を呈する。長さ約80cm、幅約30cmを測る。深さは5cmと非常に浅いが、包藏される遺物が10cm以上浮くことから、調査上のミスにより遺構検出面を1層下げ過ぎてしまったものと思われる。壁面は斜めに立ち上がり、復元高は約20cmになるものと推定される。遺構内上層に須恵器壺の破片が少量包含されていた。

埋土 残存部分が浅かったため、詳細な確認はできていない。

出土遺物 須恵器壺形土器の1個体分が、破碎された後に投棄されたような状態で出土している。

#### (3) 不定形土坑

調査区のほぼ全域で検出されているが、中央部に若干分布が希薄となる傾向にある。さらに、長さが1m程度の長径のものは調査区の南端部(尾根の先端部付近)に集中している。個々の記述は意味をなさないため、平面形の典型的な2例を以下に記述する。

SK01 (図版18)

形状・規模 長径約60cm、短径約35cmの変形楕円形の平面形態を呈する。断面は浅いU字形の舟形底部となる。堆土に焼土層があるが、壁面の赤化はみられない。

埋土 淡黄色シルト質極細砂土で大半が埋まり、その上を焼土が薄く覆っている。

出土遺物 遺物はまったく出土していない。

SK02 (図版18)

形状・規模　円形に近い隅円方形の平面形となる。残存状態は良くないが、壁面は斜めに立ち上がり、平底となる。埋土内に炭片が含まれるが、火を受けた形跡は確認できない。

埋土　深度はないものの灰黄色シルト質細砂で埋められ、埋土内に炭片をわずかに包含している。

出土遺物　遺物はまったく出土していない。

### 第3節 出土遺物

#### 1. 弥生土器

B地区 SX01より壺(2)、SX02より壺(1)が出土している。

(2)は体部最大径が胴部上半にあり、底部に向かって直線的に窄まる。その底部には焼成後による比較的大きな穿孔がなされている。口縁部は短く「く」の字に外反し、縁部は横方向のナデによりわずかに上方に屈曲する。口縁部は内外面とも横方向にナデる。体部外面は二段に涉って縦方向に刷毛目調整を施し、内面は縦方向に施によってナデアゲする。

(1)は弾頭形の体部に緩やかに外反する口縁部を持つ。頸部外面には一条の粘土帯を巡らし、その上を指揮させた後刷毛状工具により列点文を加飾する。底部は小さな平底となる。口縁縫部は内傾する小さな面をなし、その下方外面には二条の低い凹線が巡らされる。口縁部を含め外面は、やや右に傾く縦方向の刷毛目調整が行われる。内面は遺存状態が良好ではないが、口縁縫部は横方向にナデ、以下はナデとなるようである。頸部を抉んだ上下に指頭圧の痕跡を残す。

#### 2. 須恵器

A地区 SK01より壺(3)が1点出土する。

(3)は口縁部のみである。直線的に外反した後、内外面を抉んで小さな水平面を形成する。内外面ともヨコナデ調整とするが、胴部内面には同心円文が垣間見られる。横瓶となる可能性も考えられる。

B地区 SK03・P 1・P 2より、古代に属すると思われる須恵器が出土している。そのうち国化できたのは、B地区 SK03より出土した壺(4)のみである。

(4)は口縁部の破片であり、外湾しながら開く。端部は小さな水平面となった後、上下に抉むことにより小さな垂直面を形成する。

### 第4節 小結

今回の調査では、弥生時代と平安時代の遺構・遺物を検出した。本調査区は周囲の尾根と比べて広い平坦面をもつにもかかわらず、明確にその性格を判断できる遺構は、尾根の先端付近で弥生時代の墓を2基検出したのみであった。尾根の最先端部まではほとんどが調査区外となるが、尾根のほぼ全面が墓域となっている第1地点と比較すると大きな違いを示している。また第3地点では空白の時期となる古墳時代についても、周辺には櫛山古墳群など多数の古墳が存在するにもかかわらず、本地点付近では尾根先端部に古墳が確認できるにすぎない状況にある。この遺構の稀薄さは、後世の削平により消滅した可能性も十分に考えられるが、尾根自体が当時の集落を想定する鳥居付近から直視でない、やや奥に入った場所に該当しているという根本的な要因によるところが大きいと考えられる。実際に、尾根上全域が活用されるのは平安時代に入ってからのことであるが、生活域としてではなく、墓域あるいは畠地等の生産域として開墾・利用されていたことが想定される。

## 第5章 まとめ

### 第1節 第1地点の方形周溝墓について

貝谷遺跡の第1地点では、調査区のほぼ全域から土器棺墓・木棺墓をあわせ30を越える埋葬施設や、溝、土坑など多数の遺構が検出された。埋葬施設の中には、溝によって区画された平面内に位置するものが存在しており、尾根上の平坦地に方形に区画された12の平面（以下、方形周溝墓と呼称）がつくり出されている。方形周溝墓の中には、周溝内に木棺墓が検出されなかったものがある一方、方形周溝墓から外れた位置より検出された木棺墓も多数存在しているため、再考あるいは細分類することは可能であると思われる。以下、方形周溝墓を構成している溝の形状およびそれとともに方形周溝墓の分類・規定について記述を進めていきたい。

検出された溝の平面の形状は、棒状を呈するもの（I類）、二辺あるいはそれ以上の多辺を形成するもの（II類）、土坑状を呈するもの（III類）の3種類であり、12基の方形周溝墓はこれらの1本あるいは2本ないしそれ以上の溝の組み合わせなどにより4種類（A・B・C・D類）とその他の形態によつてつくり出されている（第9表）。

A 1	A 2	B b	C 1	C 2	D類
A類		B類		C類	
方形周溝墓 8	方形周溝墓 4・12	方形周溝墓 11	方形周溝墓 10	方形周溝墓 7	方形周溝墓 9
					方形周溝墓 6・(1)

第9表 第1地点 方形周溝墓分類表

**A類** 尾根に平行する1条の溝によって平面が区画されるもの

A1 溝の東側に平面が広がる

A2 溝の西側に平面が広がる

**B類** 尾根に平行する2条の溝の間に平面が形成されるもの

Bb 平行する2本の溝に一部尾根に直交する土壌状の溝が加わる

**C類** 尾根に平行および直交する2条の溝によって平面が区画されるもの

C1 2条の溝が「」形を呈する

C2 2条の溝が「」形を呈する

**D類** 1条の溝が四辺を巡るものおよびその可能性が高いもの

その他 A～D類に属さない溝の形態によって平面を区画するもの

第4図の方形周溝墓は平面を区画する溝の外側を含めて図示しているが、方形周溝墓の大きさについては、溝の内側を一辺の端として計測している。また、1条の溝によって方形周溝墓と規定しているA類については、B・C・D類の比率（=長辺÷短辺）の平均値を基準にして図示し、計測はB～D類

およびその他の方形周溝墓に準じている。分類・規定した12基の方形周溝墓個々の概要は以下の通りである。

**方形周溝墓1** 南側調査区外へ続いていくSD01（II類）によって東西約5m、南北約1m以上の平面が形成されている。方形周溝墓北端のわずか一部であるが、尾根上の平坦地に立地している。／D類

**方形周溝墓2** SD01（II類）およびSD02・03・05（III類）の4条の溝が東西約8m、南北約10.5mを測る長方形を形成している。尾根上の平坦地に立地しているが、区画する4条の溝は明確に方形に巡っておらず、周溝内には木棺墓は検出されなかった。／その他

**方形周溝墓3** SD07・09・11（I類）、SD10（II類）およびSD06（III類）の5条の溝によって東西約4.5m、南北約19mを測る細長い平面が形成されている。尾根上の平坦地に立地し、周溝内には2基の木棺墓（SX03・04）が検出されている。／その他

**方形周溝墓4** SD08（I類）によって西斜面地に立地する4基の木棺墓（SX05～08）を区画するよう東西約3.5m、南北約7mを測る長方形を形成している。他の方形周溝墓が尾根上の平坦地に位置しているのに対し、斜面地に立地し、また大きさもひと回り小さいものである。／A2類

**方形周溝墓5** SD10（II類）によって東斜面地を約4m四方に区画するものである。ほぼ尾根の稜線に沿って形成されている方形周溝墓のうち、唯一それらとは異なっている。周溝内には木棺墓は検出されなかった。／その他

**方形周溝墓6** 北東角部が一部途切れているが、四辺がほぼ長方形に巡るSD13（II類）によって東西約3m、南北約6mを測る長方形に区画されている。複数の溝によって区画されているものや、1条あるいは2条の溝から平面を想定している他の11基の方形周溝墓とは大きく異なり、溝が周囲をほぼ全周するものである。尾根上の平坦地に立地しているが、周溝内からは木棺墓あるいは盛土は検出されなかった。／D類

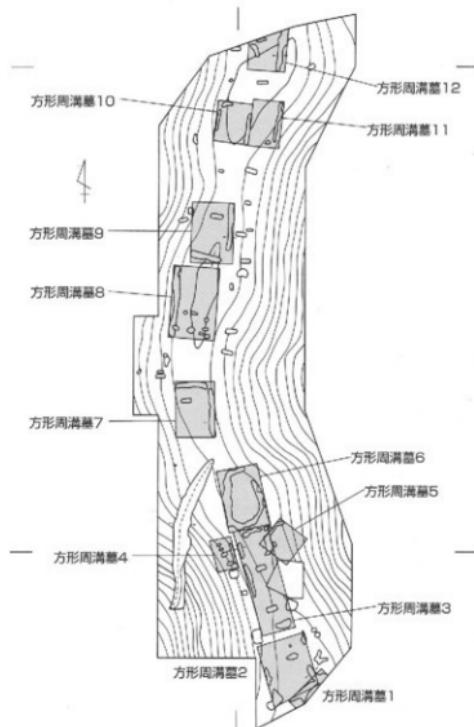
**方形周溝墓7** SD14・15（I類）の2条の溝によって東西約7m、南北約10mを測る長方形を形成している。尾根上の平坦地に立地し、周溝内には北西に偏っているが、木棺墓が1基（SX10）検出された。SD15内のほぼ全面には土器が散乱しており、絵画土器を含め多くの土器が一括して出土している。／C1類

**方形周溝墓8** SD16（I類）によって尾根上の平坦地に東西約9m、南北約14.5mを測る長方形を形成している。周溝内の南半部では3基の木棺墓（SX18～20）と複数の土坑が検出されている。／A1類

**方形周溝墓9** SD17・18（I類）の2条の溝によって東西約7m、南北約11mを測る長方形を形成している。尾根上の平坦地に立地し、周溝内には木棺墓が1基（SX25）検出された。木棺墓はこの他、今回規定した方形周溝墓外の西斜面地に2基（SX26・27）、東斜面地にも4基（SX22～24・28）が検出されている。／C2類

**方形周溝墓10** SD20・21（I類）およびSD22（III類）の3条の溝が東西約5.5m、南北約8mを測る長方形を形成している。尾根上の平坦地に立地しているが、周溝内には木棺墓は検出されなかった。／Bb類

**方形周溝墓11** 方形周溝墓10を区画するSD20とSD19（I類）の2条の溝によって東西約5m、南北約9.5mを測る長方形を形成している。尾根上の平坦地から若干東斜面地に傾斜する地点に立地し、周



第4図 第1地点 方形周溝墓平面図 (1/1,000)

溝内の南端には南西部が一部削平された木棺墓が1基 (SX31) 検出された。／B類

方形周溝墓12 北側調査区外へ続いていくSD23 (I類) によって尾根上の平坦地に東西約6m、南北約8m以上の平面が形成されている。周溝内には木棺墓は検出されなかったが、複数の土坑が確認されている。／A 2類

以上、方形周溝墓と呼称し、分類・規定した12基について記述を行ったが、いくつかの特徴的な点を指摘し、第1地点の遺構についてのまとめとしたい。

第1地点の方形周溝墓は、周溝および木棺墓の切り合い関係は確認されておらず、周溝墓間の新旧関係あるいは築造順序を判断することは困難である。その中で木棺墓 (SX14) を切り込んでいる土器棺墓 (SX15) や溝 (SD22) に切り込まれている土器棺墓 (SX32) が存在しているため、個々の遺構はある時間の経過の中で形成されたものと考えられる。これは、木棺墓の立地あるいは主軸などの違いや出土している遺物からも判断される。また、方形周溝墓の分類・規定については、調査成果に基づくもの

であり、尾根上の平坦地が後世の削平を受けていたと考慮すれば、また違った形態分類が可能である。これは、方形周溝墓内ではいずれも盛土は確認されず、埋葬施設については検出されなかつたものや壁の立ち上がりの低いものが多くみられたことなどから、その可能性は十分に考えられることである。周囲を巡る溝についても D 類とした方形周溝墓 6 のように四辺を区画する溝が存在することから、一辺あるいは二辺の溝によって平面を形成している A ~ C 類の中には削平によって消滅した溝の存在も考えられる。いずれにしても、東播磨地域ではこれまでに検出例がなかった尾根上に形成された弥生時代中期後半を中心とした土器棺墓を含む方形周溝墓群の調査によって貴重な成果がえられ、今後麗に広がる島町遺跡や周辺の遺跡との関係を検討していくことが必要である。

## 第2節 SD15出土の絵画土器について

貝谷遺跡の第1地点の調査において、第2章で詳述した SD15 よりシカの絵が線刻された土器片（18. 国版23・写真図版22・24）が出土した。SD15 からはこの他、ほぼ完形の短頸壺（15・16）や壺（17）など多数の土器が一括して出土している。

シカが線刻された土器片（以下、絵画土器）は壺形土器の一部であり、頸部に近い体部上方にあたる約1/4が残存している。欠損している頸部から口縁部に至る部分と約3/4におよぶ体部については、溝内から出土した土器片を詳細に観察し、可能な限り復元に努めたが、接合しうる破片は見つかなかつた。絵画土器は、残存している部分から大きさを復元すると、腹径49.2cmを測り、器高は第1地点より出土している他の壺形土器を参考にすると70cm前後の大型のものと考えられる。外面にはハケメの痕跡が残っているが、全体的に表面は摩滅している。

線刻された絵画は、土器の頸部に近い体部上方に鋭利な刃先状のもので直線および一部曲線によって側面から描かれた一頭のシカである。シカは向かって左側に頭部があり、尻尾の先端部分がわずかに欠損しているが、ほぼ完全にその姿を認識することができる。線刻されたシカは、全長およそ7.7cm、高さ4.8cmを測り、4本の脚、胴部、頭部、頭部で構成されている。各部位についてみると、脚部は、単線4本で前後4本の脚を表現し、脚先が前方向に頭著に折り曲げられている。胴部は半円形で表現され、直線部を背に弧の部分を腹にして描かれ、体内は斜格子で充填されている。頭部は、比較的短い2本の線によって抽象化されている。頭部については、単線のみで表現され、角は描かれていない。シカの絵画の下方には数本の直線状の痕跡がみられるが、練刻された絵画の一部かどうかは不明瞭のため判断することはできない。

絵画土器が出土した SD15 は、SD14とともに方形周溝墓 7 を形成しており、周溝内には埋葬施設が1基（SX10）確認されている。溝内から出土した絵画土器を含めた多数の土器は、一括して供獻された土器群と考えられ、そのうち、絵画土器は先述したように全体の3/4が残存しておらず、意図的に破壊された可能性が高いと思われる。また、第1地点より出土したシカの絵画は、頭部および頭部は極端に抽象・省略化されており、角が描かれていないのが特徴である。弥生土器と銅鐸の絵画にはシカがもっとも多く描かれており、銅鐸に描かれたシカのはほとんどに角が表現されていない一方、土器のシカの多くには角が表現されているといわれている。角の有無については、牝と牡との違いや、シカの角が年ごとに生えかわることから、秋以降（仲角）と初夏（落角）の季節の違いなどが指摘されている。しかし、今回出土したシカの絵画については、絵画土器の全体の形状およびシカの他に描かれていたと考えられ

るその他の絵画については不明であり、シカの全体的な構図の不均衡さや角が描かれていないことについては、これ以上言及することは不可能である。今後、方形周溝墓群と周辺の遺跡との関係に加え、出土した絵画土器を含めた遺物についても東播磨地域あるいはさらに広い地域との関係を検討していく必要がある。

#### 参考文献

- 寺沢 喜・森岡秀人編著『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ・Ⅱ 木耳社 1989  
春成秀爾「角のない鹿—弥生時代の農耕儀礼—」横山浩一先生退官記念論文集Ⅱ『日本における初期弥生文化の成立』1991  
佐原 良『遺跡が語る日本人のくらし』岩波ジュニア新書234 岩波書店 1994  
藤田三郎「弥生土器における土器絵画(1)・(2)・(3)」「みずほ』第9・10・12号 大和弥生文化の会 1993・1994  
福田 聖『方形周溝墓の再発見』ものが語る歴史3 同成社 2000  
岸本一宏「兵庫県下の弥生時代「周溝墓」集成」「ひょうご考古」第7号 2001  
『川島・立岡遺跡』太子町教育委員会 1971  
『中山遺跡』岡山県落合町教育委員会 1978  
『東武庫遺跡』兵庫県教育委員会 1995  
『養久山・前地遺跡』龍野市教育委員会 1995  
『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書IV』—有鼻遺跡(1)— 兵庫県教育委員会 1999

#### 追記

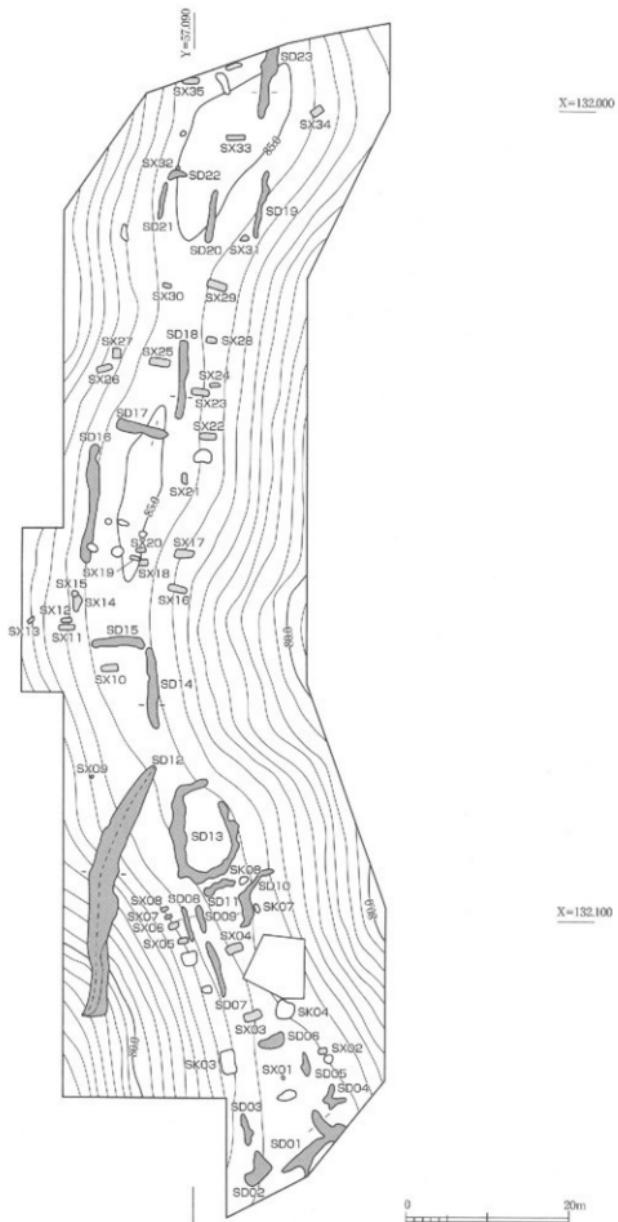
貝谷遺跡の調査は、平成6年10月から始まり、平成7年1月に終了した。調査は当初、中国陝西省から人の交流として埋蔵文化財調査事務所に派遣されていた呂智寧氏を交えて行われていた。言葉はお互い十分に理解していなかったが、発掘調査についてはなんの支障もなく進んでいった。しかし、年が明けた平成7年1月17日、淡路島の野島断層を震源とした兵庫県南部地震が発生し、状況は一変した。阪神・淡路大震災と呼ばれるようになるこの地震は、阪神間から淡路島にわたる広範囲に甚大な被害をもたらし、5,500名を超える人命が奪われた。遺跡が所在する三木市は比較的の被害が少なく、当日の午前中唯一人、現場で因縁に向かっていた。それが午後には、神戸を中心とした被災地の映像が流れた瞬間、言葉を失ったことが思い出される。数日後、被災地の惨状を気にしながら、日常の発掘調査を実施することになったが、調査は混乱のうちに終了した。

現在、遺跡のあった地点は山陽自動車道が開通し、神戸やその他の被災地も復興を遂げつつある。震災からおよそ6年の歳月を経て、ようやく報告書を刊行することとなったが、写真や図面を広げてみると、改めて十分な記録を残すことができずに調査を終了せざるをえなかったことに複雑な思いが残っている。

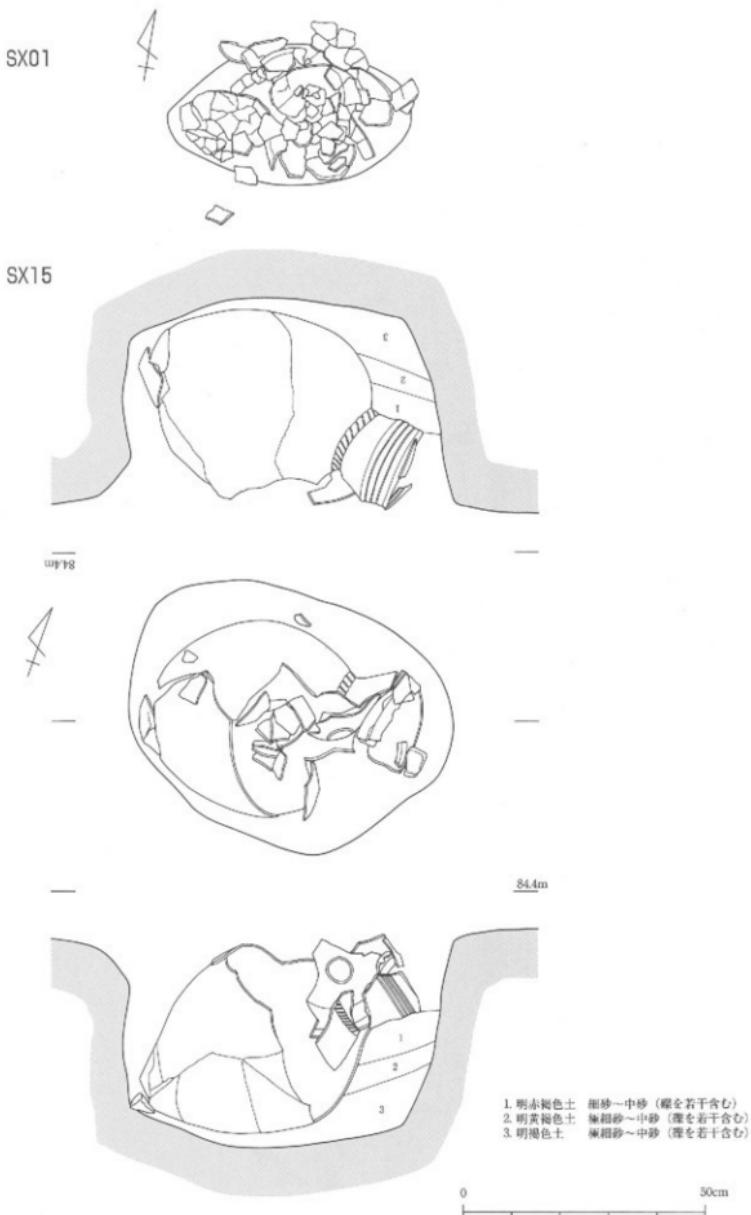
# 報告書抄録

ふりがな	かいたにいせき							
書名	貝谷遺跡							
副書名	山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告							
卷次	XXXIV							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第236冊							
編著者名	仁尾一人・平田博幸・長浜誠司							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒町田2丁目1番5号			TEL 078-531-7011				
発行年月日	西暦2002(平成14)年3月31日							
所取 遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
貝谷遺跡	市町村	調査番号						
兵庫県三木市 鳥町字貝谷 876-48他	28215	本文 第1章 参照	34度 48分 29秒	134度 57分 31秒	本文第1章参照	山陽自動車道建設に伴う発掘調査		
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
貝谷遺跡 第1地点	墳墓	弥生時代 中期後半	土器棺墓・木棺墓 溝・土坑	土器	丘陵上の墳墓群 シカの絵画土器出土			
第2地点	墳墓	弥生時代 中期後半	土器棺墓・木棺墓	土器				
第3地点 A地区	集落跡	平安時代 前期	土坑					
B地区	墳墓	弥生時代 中期後半	土器棺墓・木棺墓	土器				
	集落跡	平安時代 前期	土坑・柱穴	土器				

# 図 版



第1地点 調査区遺構平面図



第1地点 SX01 SX15

SX09

4



84.4m



L. 明晝褐色土 粗砂～粗砂

SX32

4



85.2m



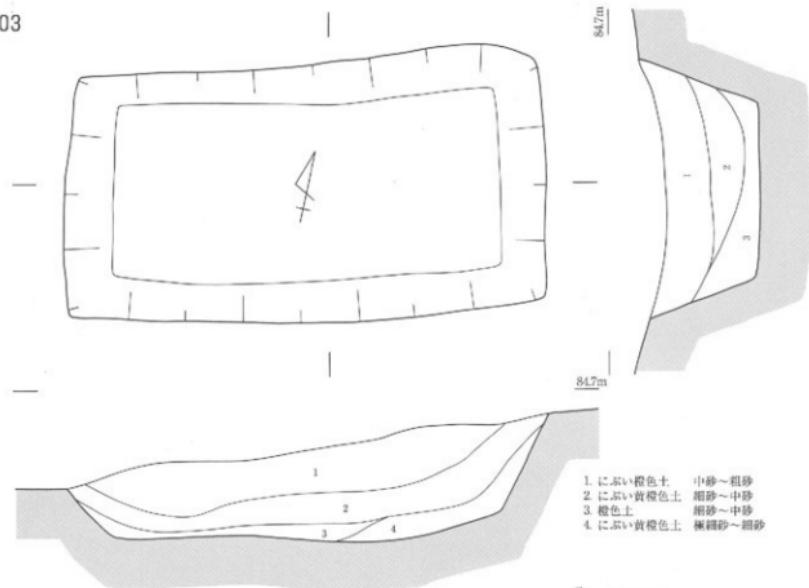
L. 黄褐色土 粗砂～細砂（雜食含む）

0

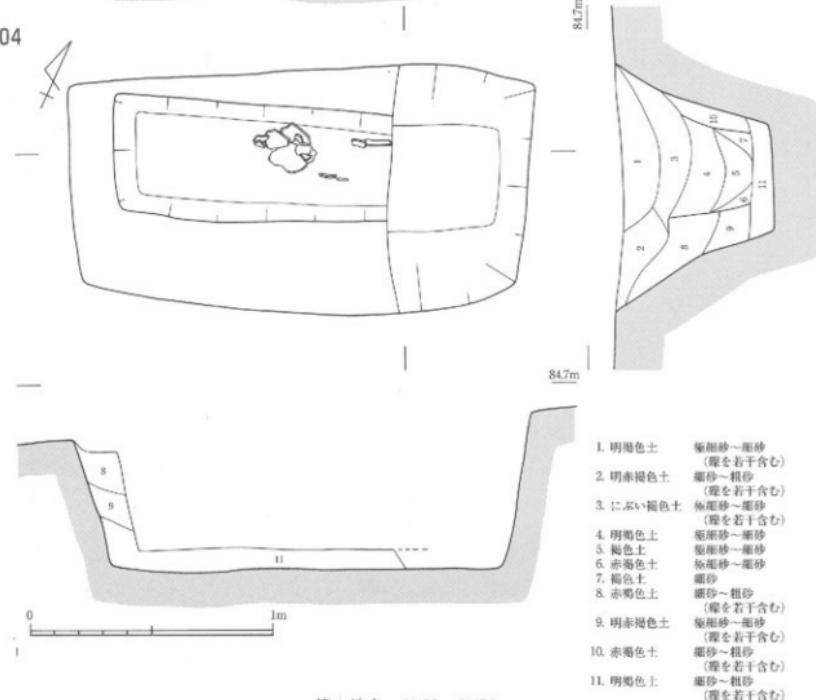
50cm

# 図版 4

SX03



SX04



第1地点 SX03 SX04

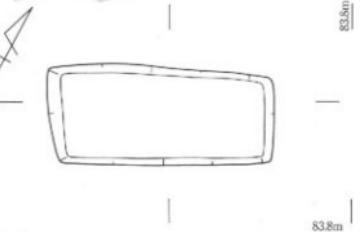
SX07



SX07

1. 明黄褐色土 細砂  
2. にぶい黄褐色土 粗礫砂～細砂  
3. 明褐色土 細砂

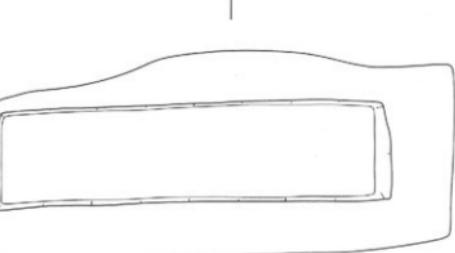
SX08



SX10

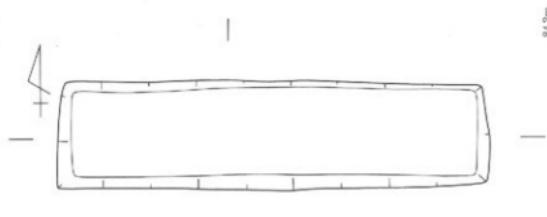
1. にぶい黄褐色土 細砂～粗砂  
2. 明赤褐色土 細砂～中砂  
3. にぶい褐色土 細砂～中砂  
4. にぶい褐色土 細砂～粗砂  
5. にぶい褐色土 細砂～中砂  
6. 明褐色土 細砂～中砂  
7. 明黃褐色土 細砂～粗砂  
8. にぶい黄褐色土 細砂～粗砂  
(礫を若干含む)  
9. 黄褐色土 細粗砂～細砂  
(礫を若干含む)  
10. 灰色土 細粗砂～細砂

SX10



# 図版 6

SX11



84.3m



84.3m

1. 橙色土 精砂～粗砂  
(鐵および炭を若干含む)
2. 明褐色土 精砂～中砂  
(鐵を含む)
3. にぶい褐色土 精砂～中砂  
(鐵を含む)

SX15



SX14



84.6m



84.6m

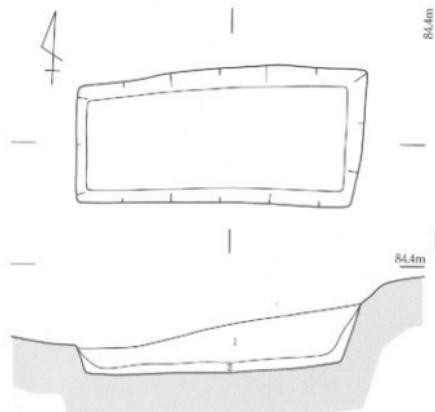
1. にぶい黄褐色土明褐色土 精砂～粗砂  
(鐵および炭を多く含む)
2. 黄褐色土 精砂～中砂  
(鐵を含む)

0

1m

第1地点 SX11 SX14

SX12

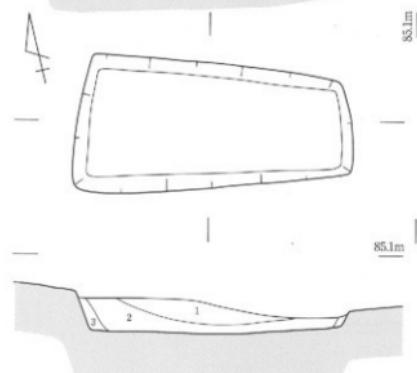


84.0m

84.4m

1. 明黄褐色土 塵細砂～細砂（礫を若干含む）  
2. 明褐色土 塘細砂～細砂（礫を若干含む）

SX19



85.1m

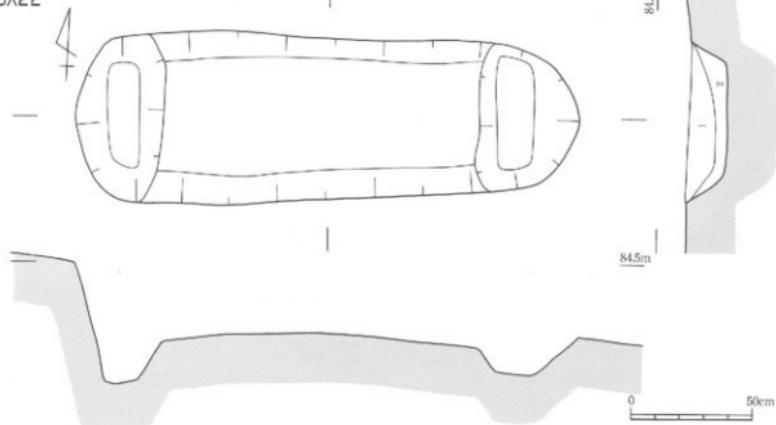
SX19

1. 明黄褐色土 細砂（礫を含む）  
2. にぶい黄褐色土 塘細砂～細砂  
3. 明褐色土 細砂（礫を含む）

SX22

1. 棕色土 塘細砂～細砂（礫を若干含む）  
2. 明褐色土 塘細砂～細砂（礫を若干含む）

SX22



84.5m

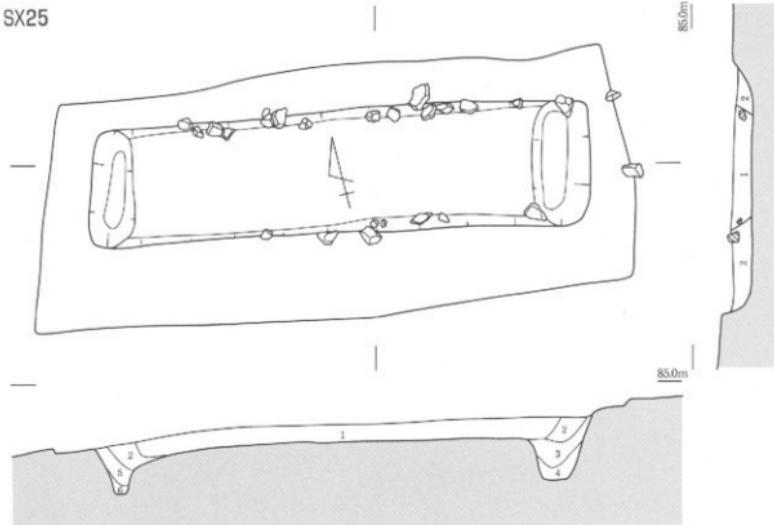
84.0m

50cm

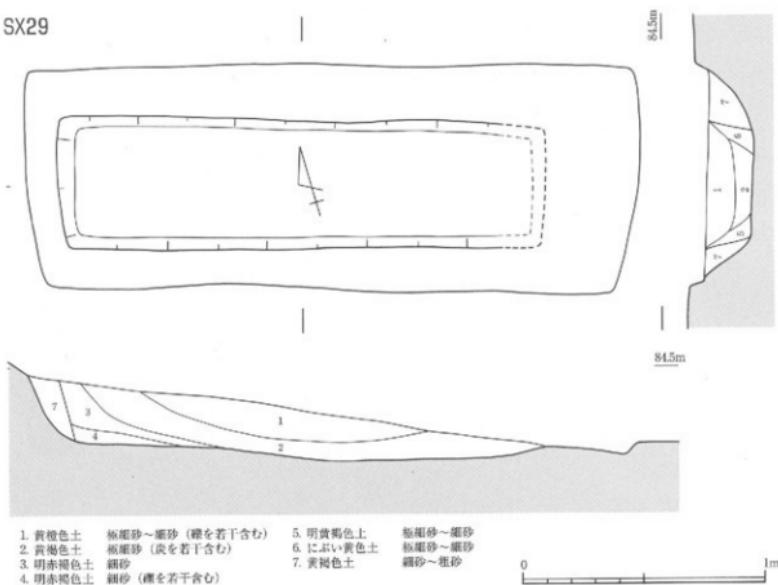
第1地点 SX12 SX19 SX22

図版8

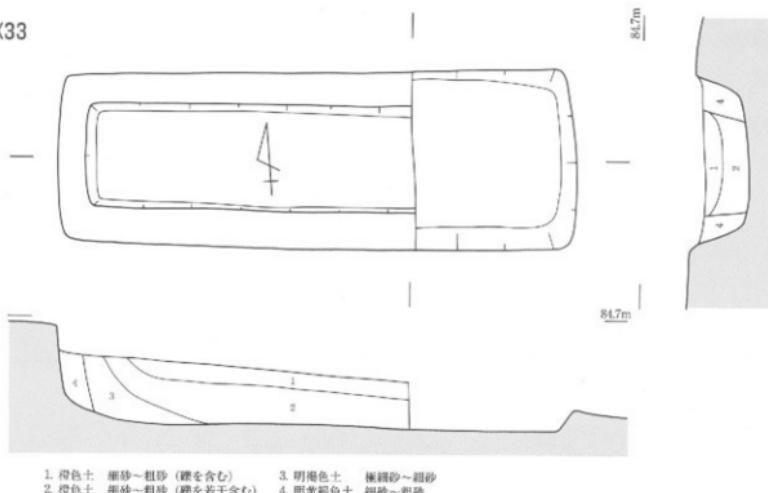
SX25



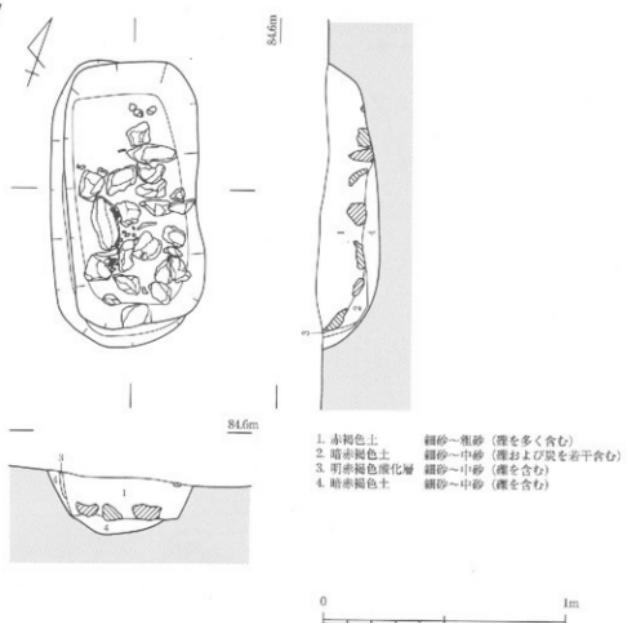
SX29



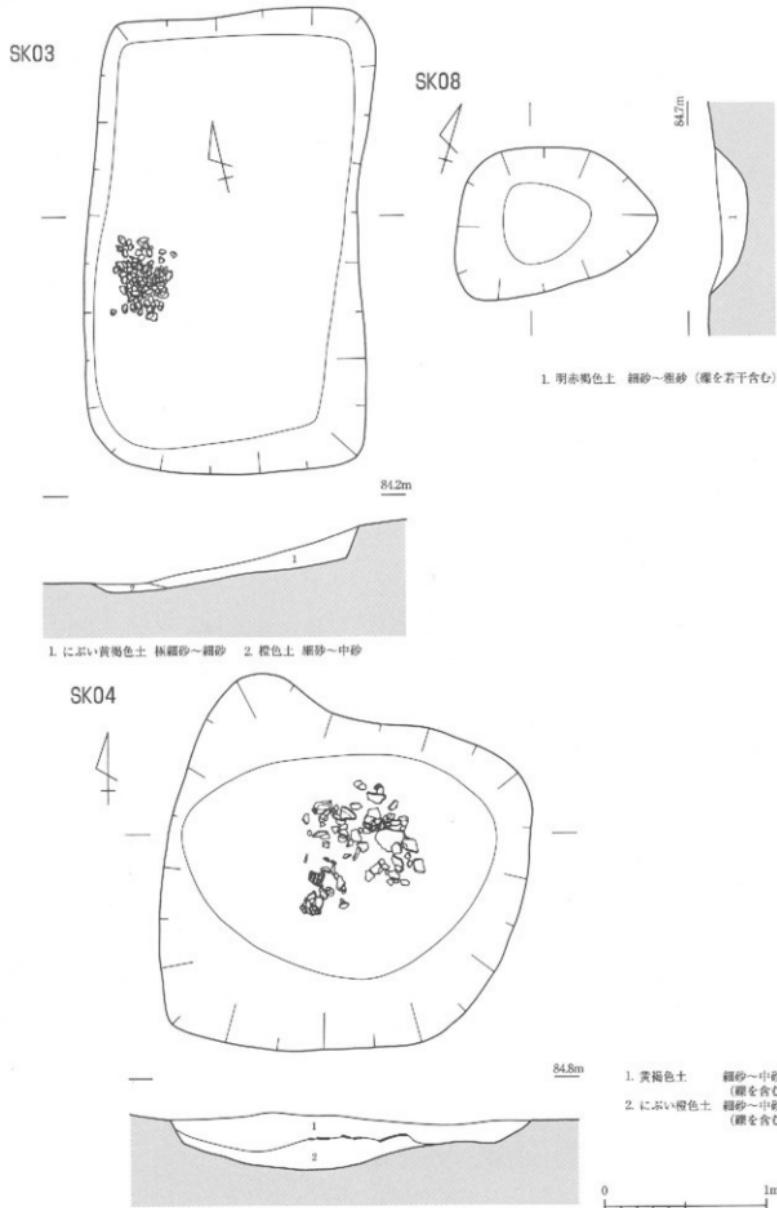
SX33



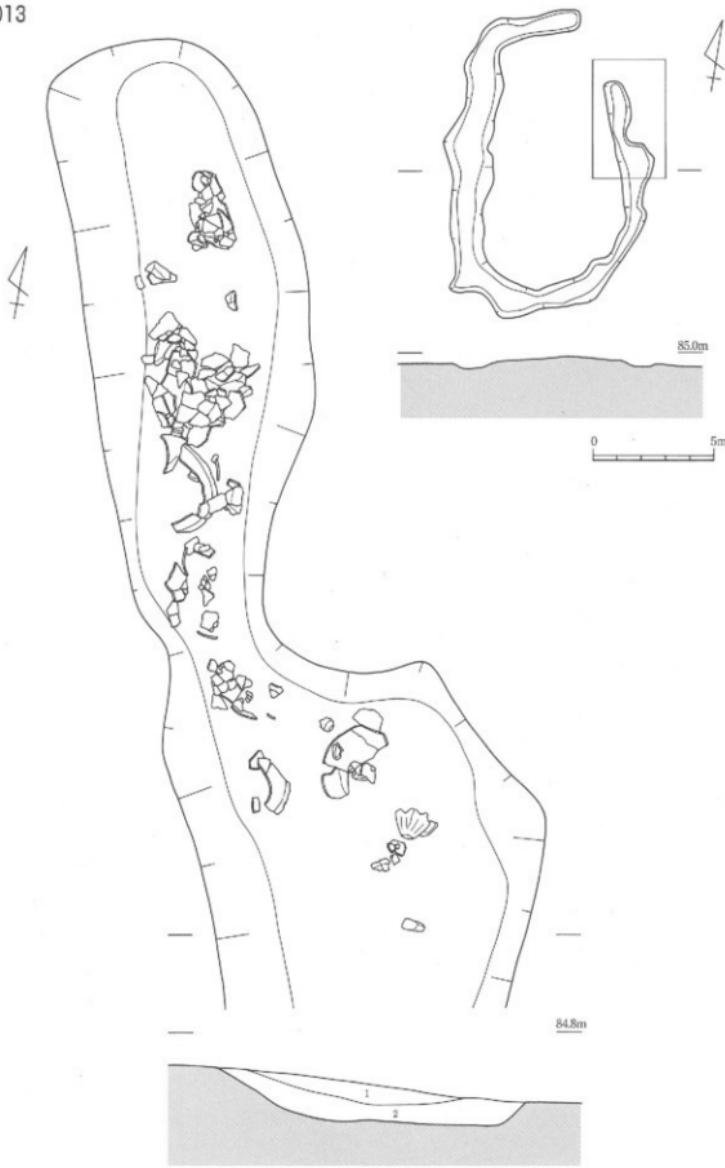
SK07



図版10

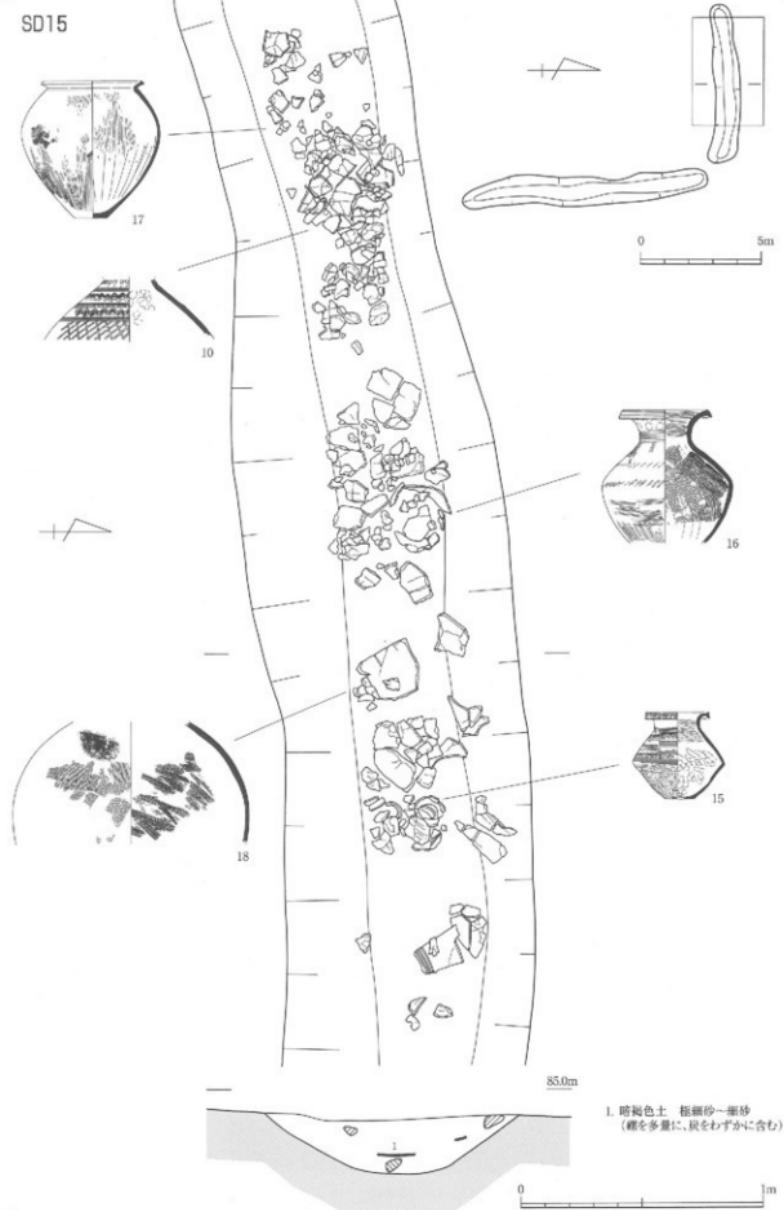


SD13



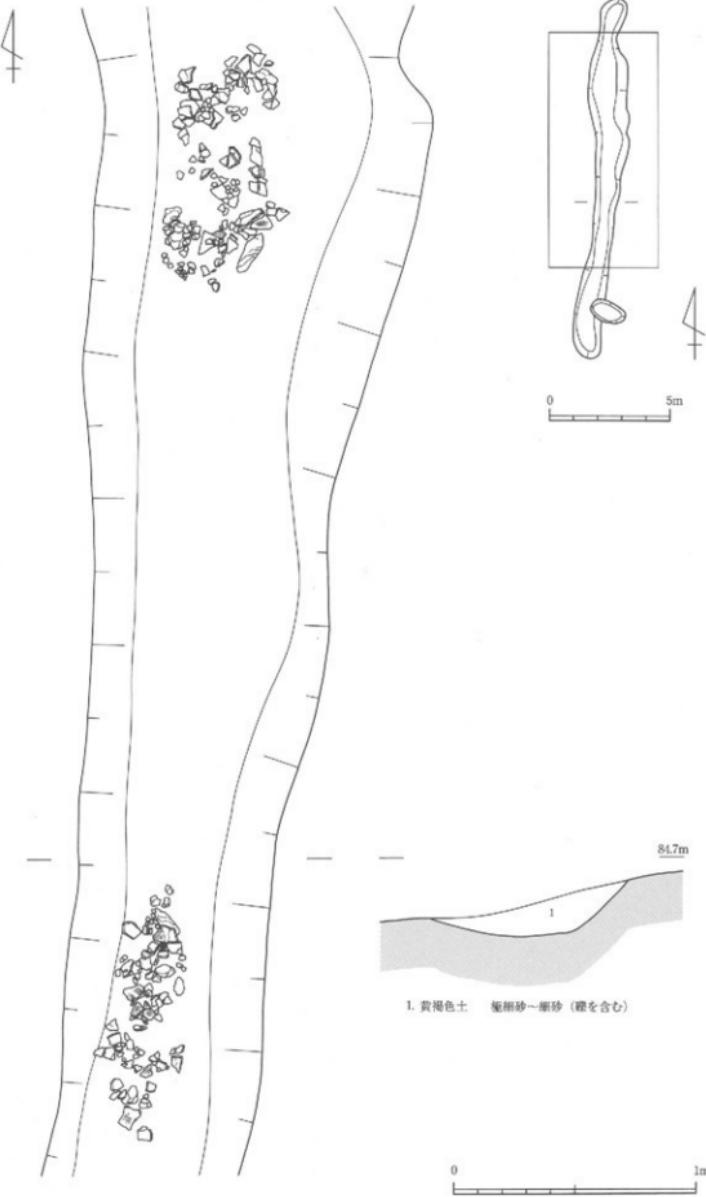
第1地点 SD13

図版12



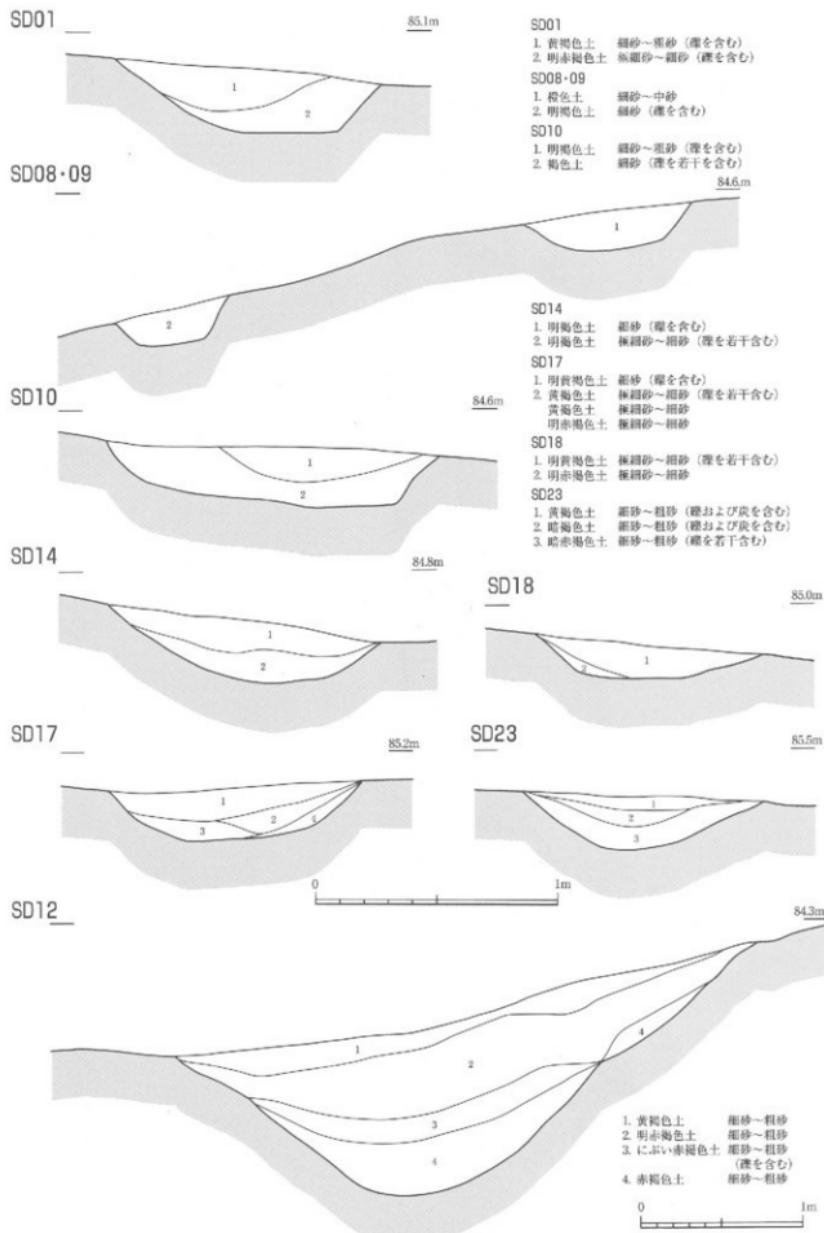
第1地点 SD15

SD16

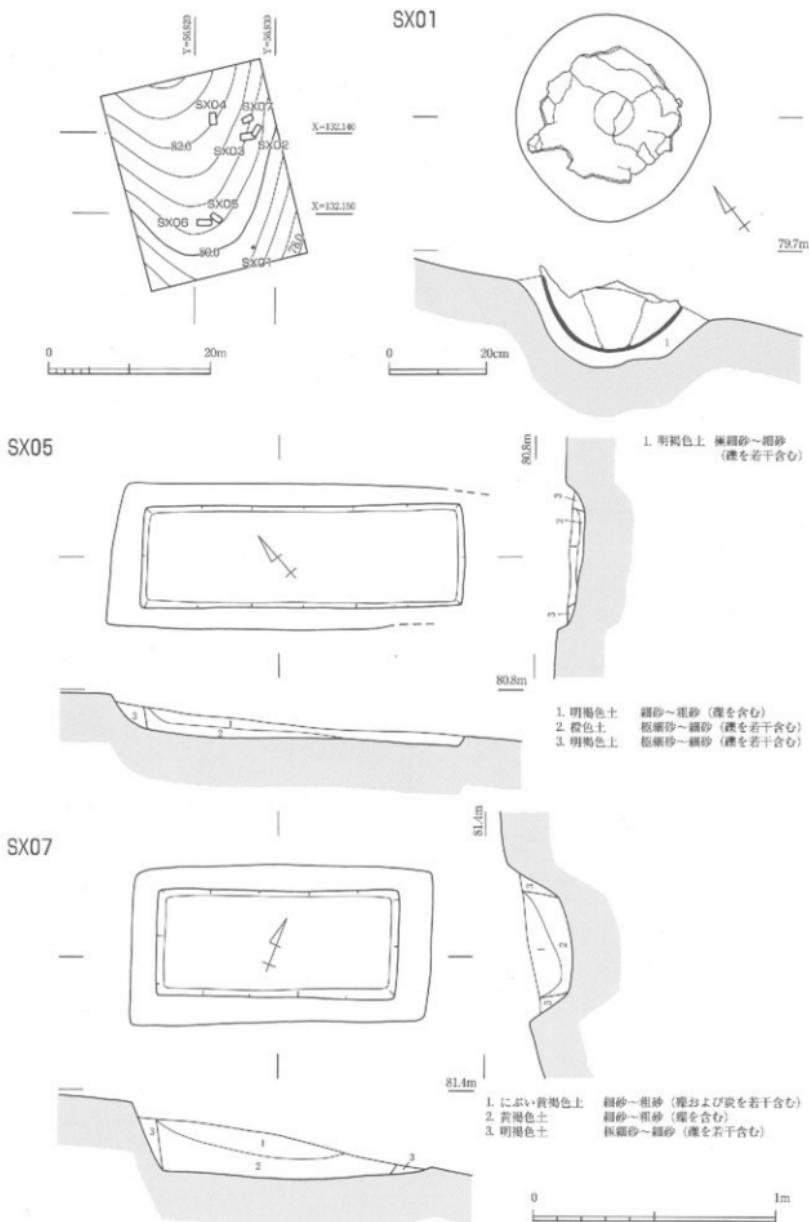


第1地点 SD16

# 図版14

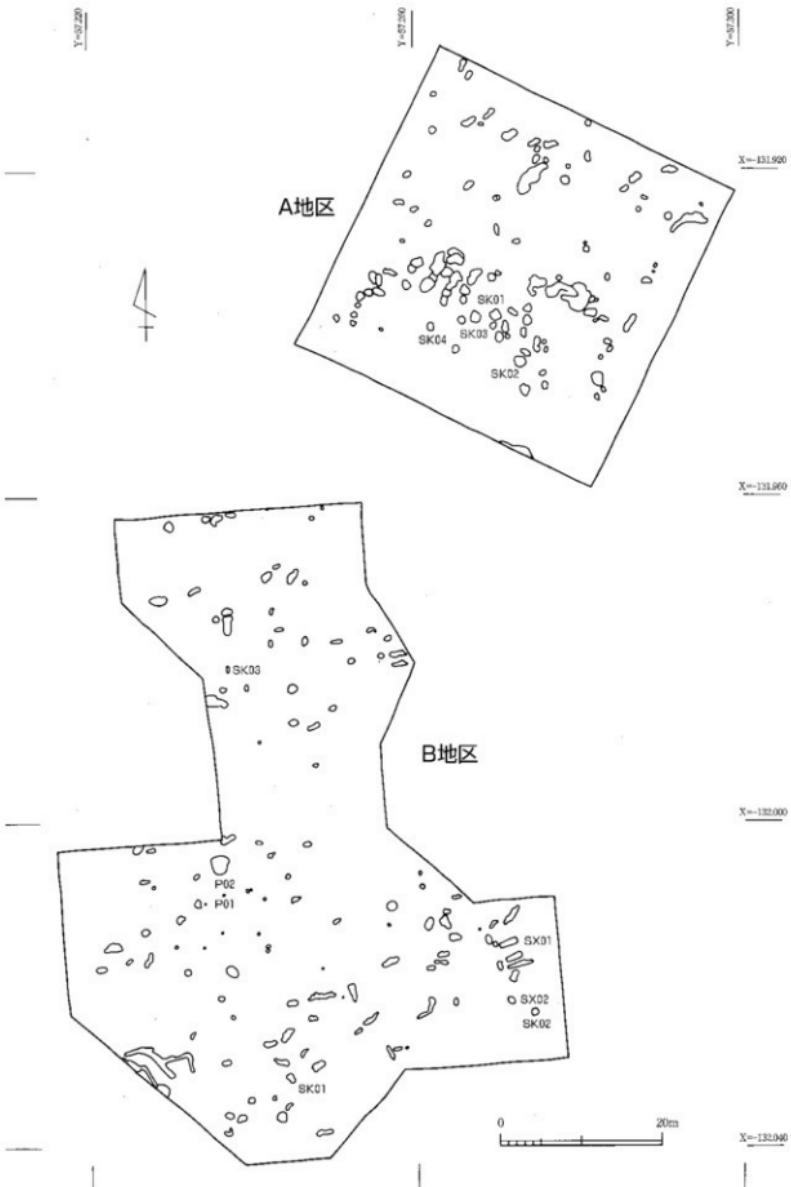


第1地点 SD01, 08・09, 10, 14, 17, 18, 23, 12 土層断面図



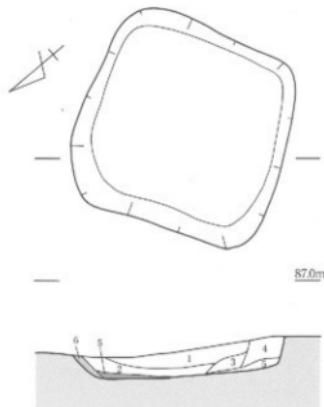
第2地点 調査区遺構平面図 / SX01 SX05 SX07

図版16



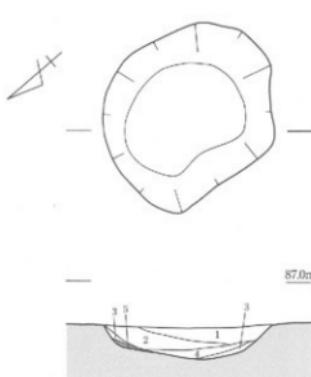
第3地点 調査区遺構平面図

SK01



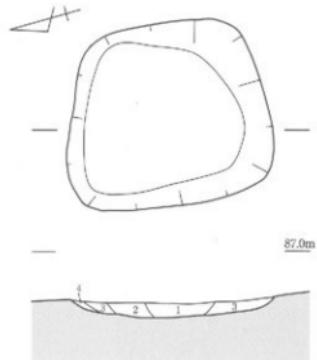
1. 黄褐色 細繊砂～中砂（灰・炭を微量含む）
2. にぶい・黄褐色 細砂～粗砂（炭を微量含む）
3. 黄褐色 細繊砂～中砂（焼土含む）
4. 明黄褐色 シルト～中砂（灰・焼土を微量含む）
5. 炭化物層
6. 烧土

SK02



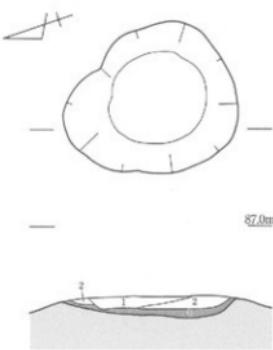
1. 黄褐色 粗繊砂～中砂（灰・炭を微量含む）
2. 明黄褐色 シルト～中砂（灰・焼土を微量含む）
3. 黄褐色 細繊砂～中砂（焼土含む）
4. にぶい・黄色 細砂～粗砂（炭を微量含む）
5. 炭化物層

SK03



1. 黄褐色 細繊砂～中砂（灰・炭を微量含む）
2. 明黄褐色 シルト～中砂（灰・焼土を微量含む）
3. にぶい・黄色 紹砂～粗砂（炭を微量含む）
4. 黄褐色 細繊砂～中砂（焼土含む）

SK04

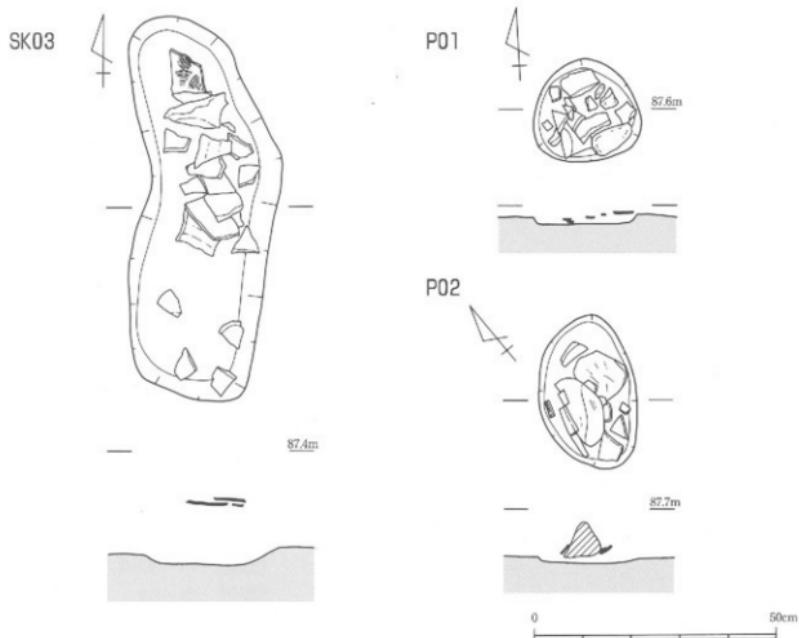
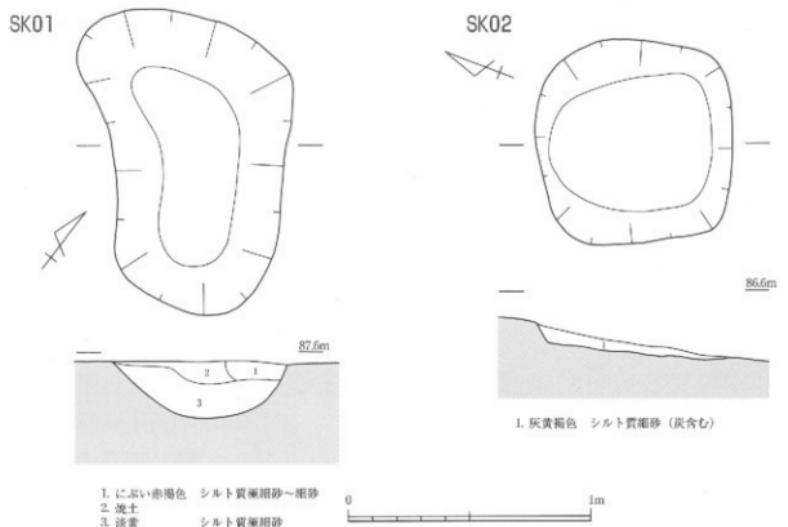


1. 黄褐色 細繊砂～中砂（灰・炭を微量含む）
2. 明黄褐色 シルト～中砂（灰・焼土を微量含む）
3. 炭化物層

0 2m

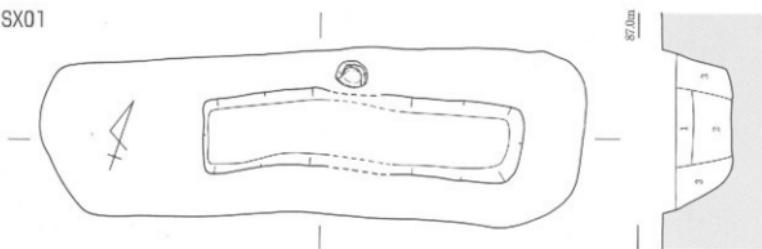
炭化物層  
 烧土層

図版18



第3地点 SK01 SK02 SK03 P01 P02

SX01



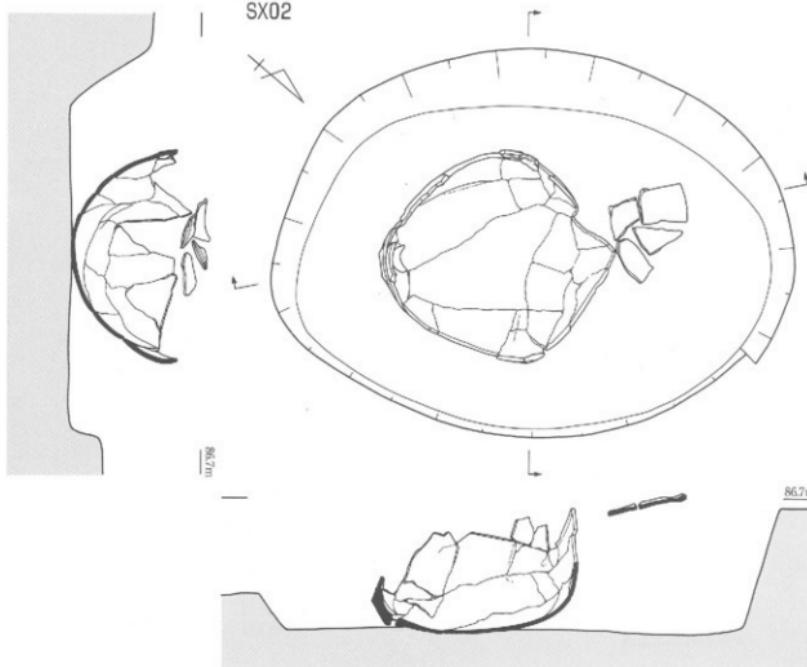
87.0m

1. にぶい黄橙色 細砂  
(含む)  
2. にぶい黄橙色 細砂  
3. 桂色 細砂

0

50cm

SX02



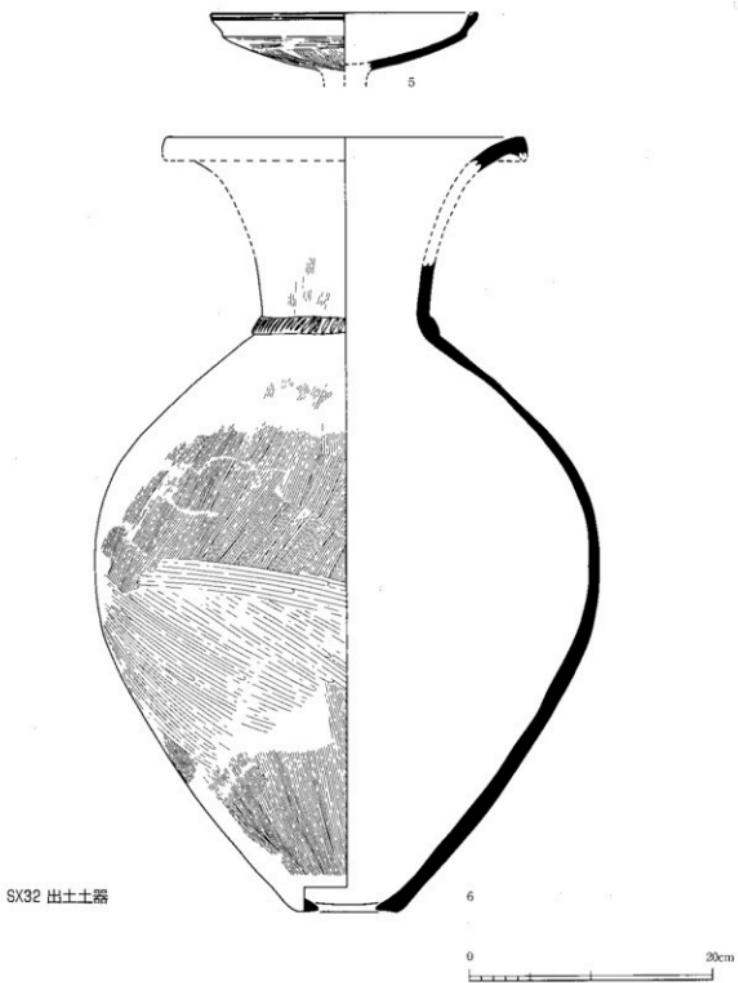
86.7m

0

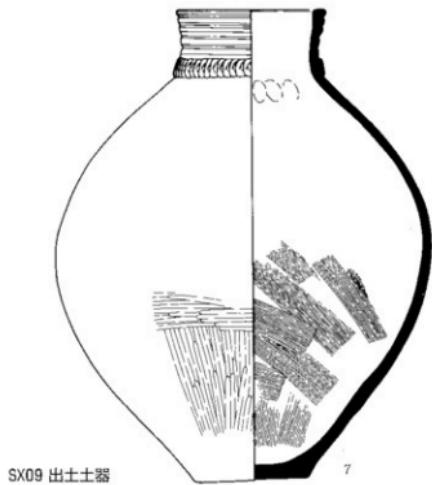
50cm



第1地点 出土土器 SX15 SX15付近

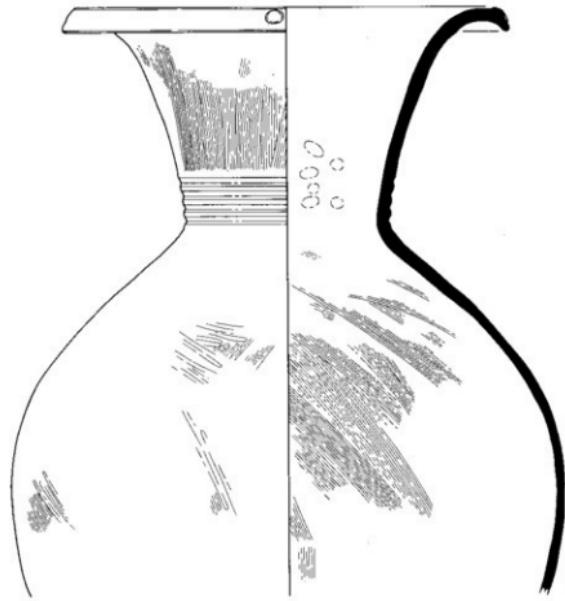


第1地点 出土土器 SX32



SX09 出土土器

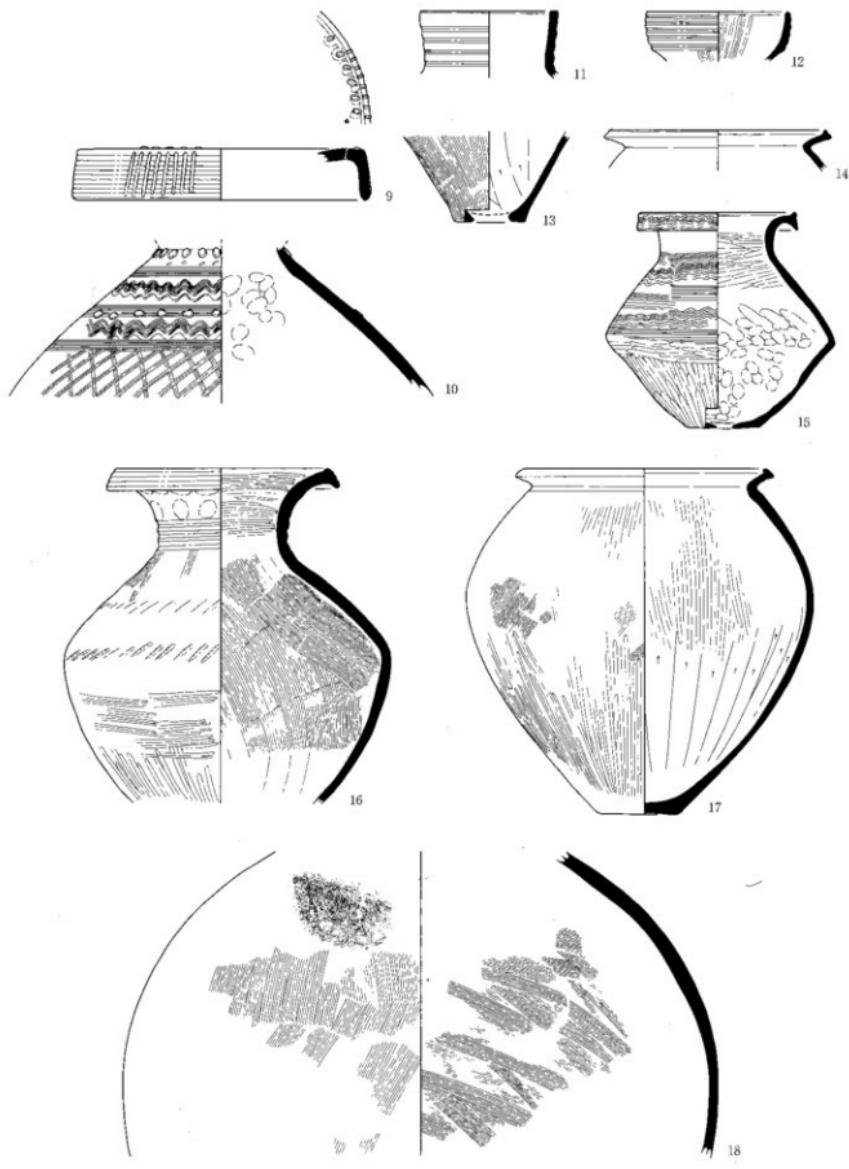
7



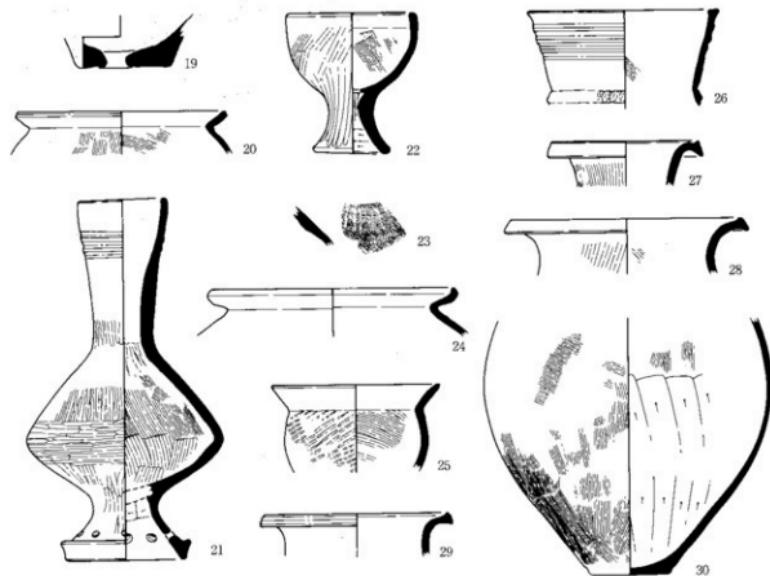
SK04 出土土器

8

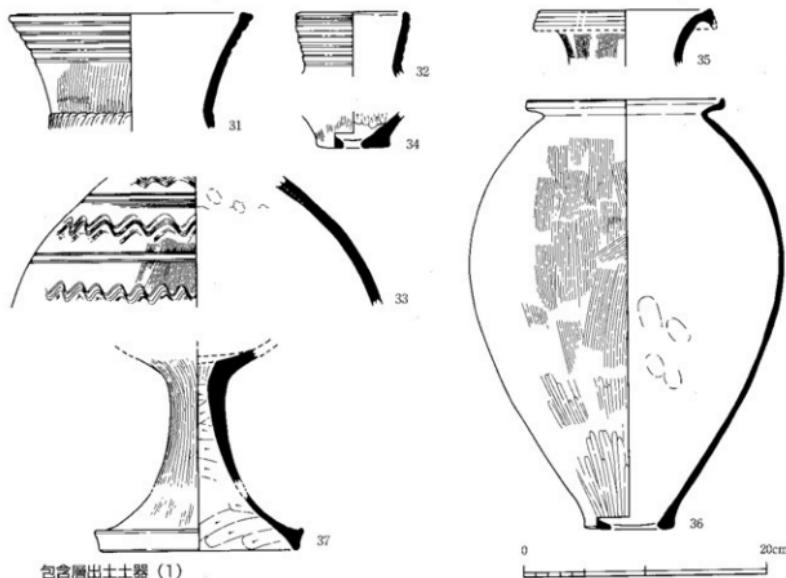
0 20cm



SD15 出土土器

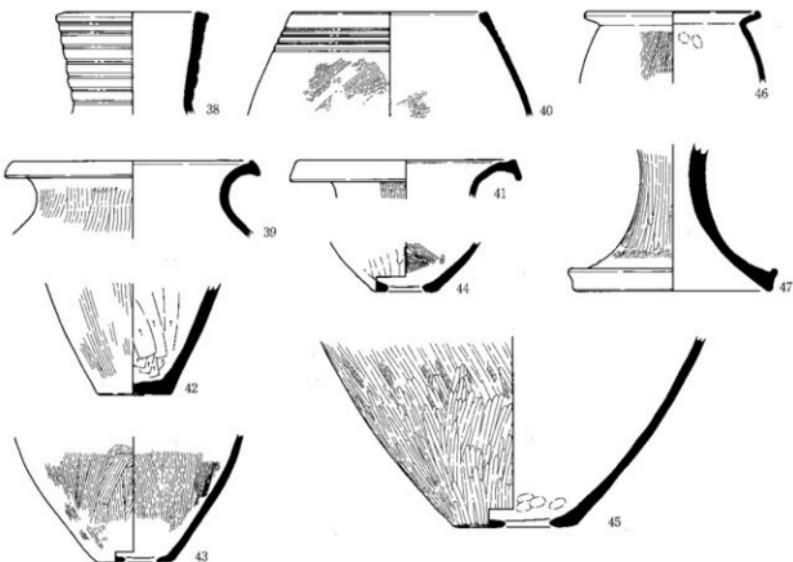


19-SD01, 20-SD04, 21・22-SD07, 23-24-SD10, 25-SD11  
26~28-SD16, 29-SD19, 30-SD23

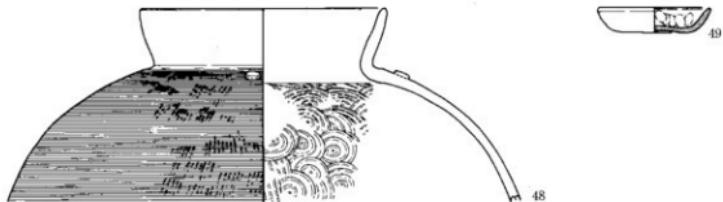


包含層出土土器(1)

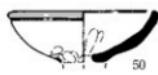
0 20cm



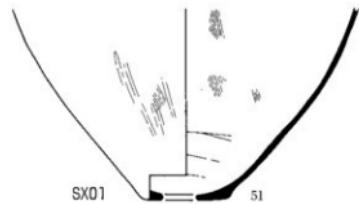
包含層出土土器 (2)



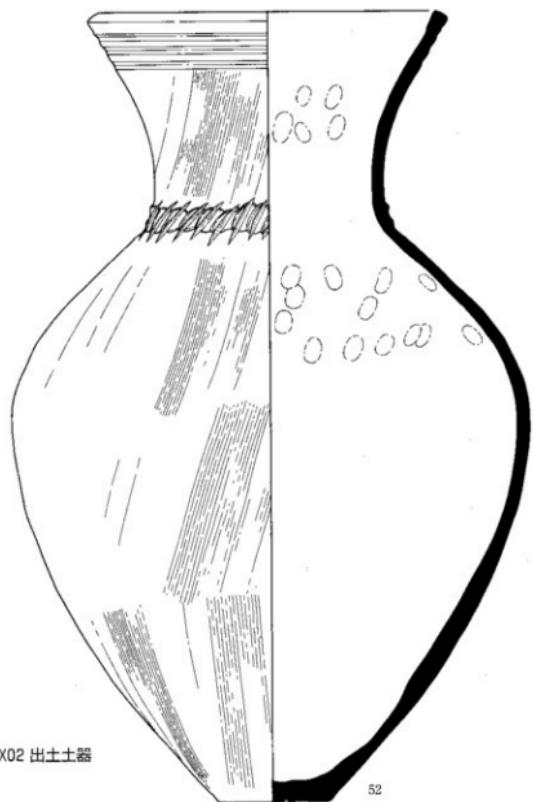
SD19上層出土土器



第2地点出土土器



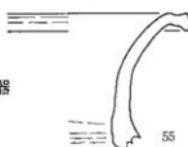
第1地点 出出土器 包含層(2) SD19上層  
第2地点 出出土器 SX01 包含層



B地区 SX01 出土土器



A地区 SK01 出土土器



B地区 SX03 出土土器



# 写真図版



貝谷遺跡全景  
(南から)



貝谷遺跡全景  
(西から)

写真図版2 第1地点



調査区全景  
(南から)



調査区全景  
(東から)

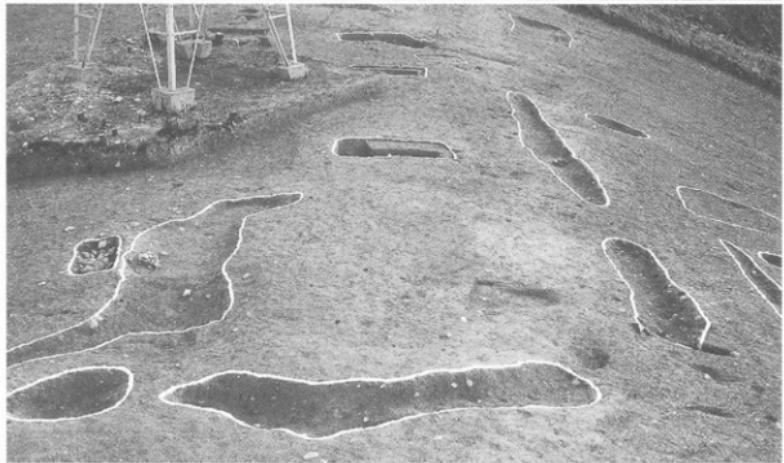


調査区南半部  
(北から)



調査区北半部  
(南から)

写真図版4 第1地点





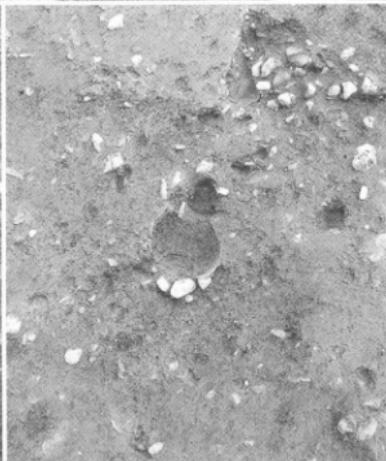
写真図版6 第1地点



SX09  
左) (西から)  
右) (北から)



SX09  
(南西から)



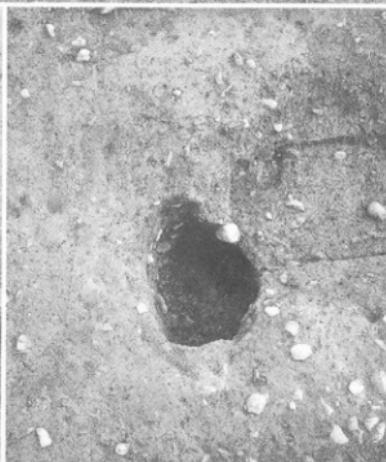
SX09  
左) (西から)  
右) (西から)



SX15  
(北から)



SX15  
左) (南から)  
右) (西から)



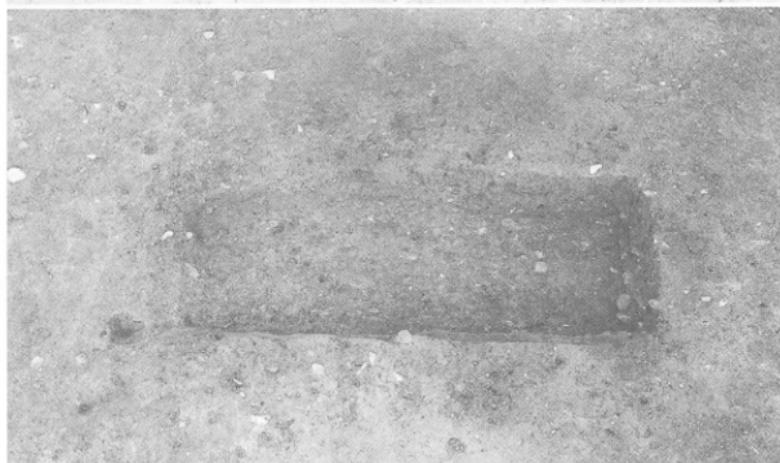
SX32  
左) (西から)  
右) (西から)



SX03  
(南から)



SX04  
(西から)



SX10  
(南から)



SX11  
(南から)



SX14  
(南から)

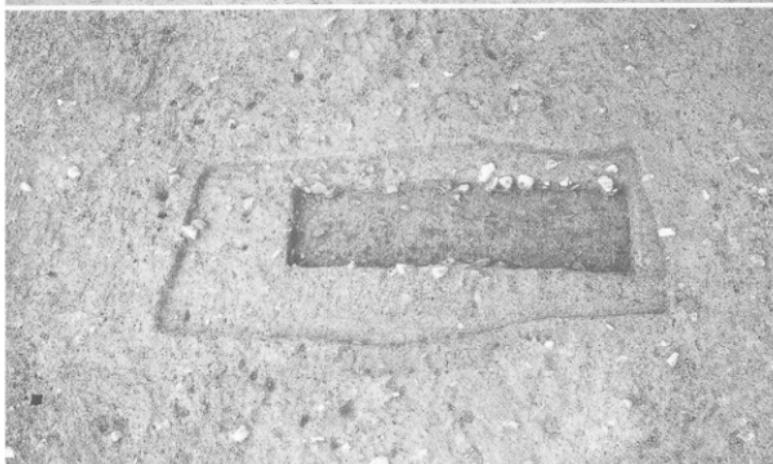


SX16  
(北から)

写真図版10 第1地点



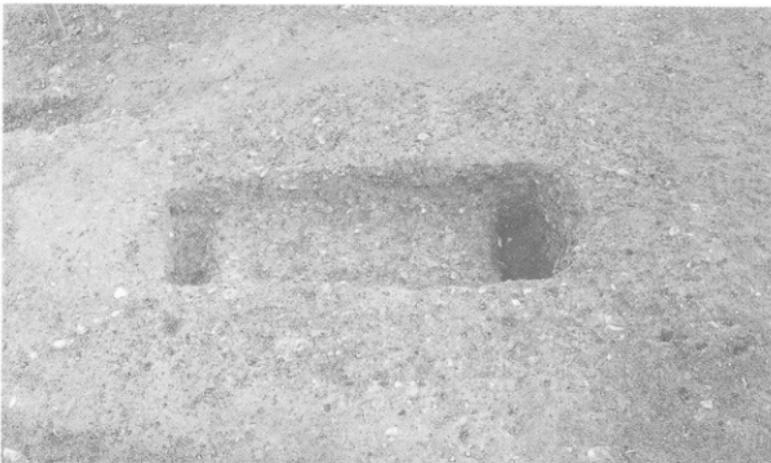
SX17  
(東から)



SX25  
(南から)



SX25  
(南から)



SX22  
(北から)



SX29  
(東から)



SX33  
(東から)

写真図版12 第1地点



SK07  
(南から)



左)  
SK03 土器出土状況  
(南から)  
右)  
SK04 土器出土状況  
(南から)



調査区全景  
(西から)



SD13全景  
(南から)



SD13 土器出土状況  
(東から)



SD13 土器出土状況  
(北から)

写真図版14 第1地点



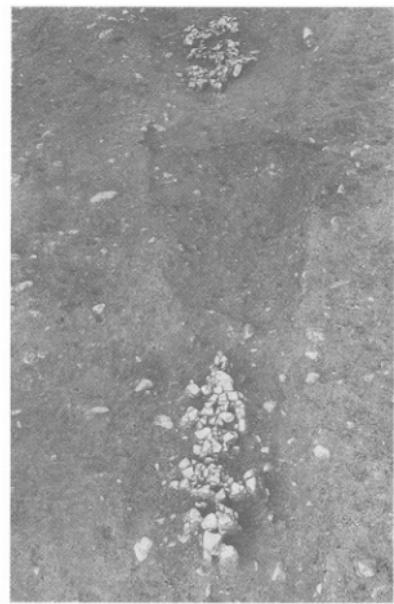
SD15 全景  
(西から)



SD15 土器出土状況  
(南西から)



SD15 土器出土状況  
左) (北西から)  
右) (南東から)



SD16  
(南から)



左) SD13 土層断面  
(南から)  
右) SD15 土層断面  
(東から)



左) SD16 土層断面  
(南から)  
右) SD12 土層断面  
(南から)



調査状況

左) (北西から)  
右) (東から)





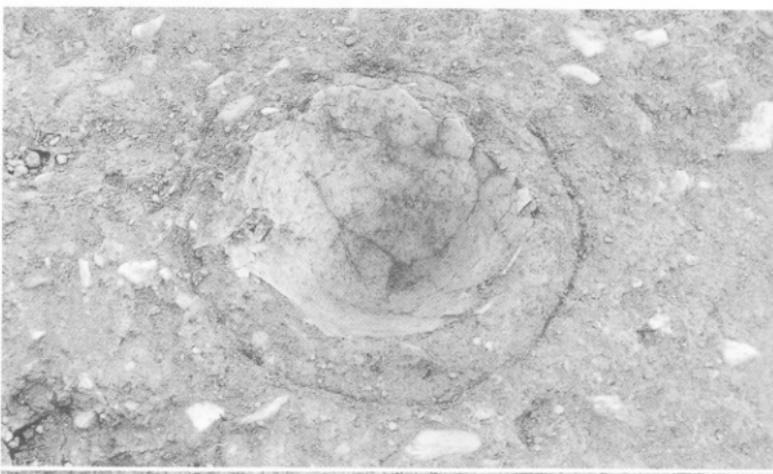
調査区全景  
(南から)



調査区全景  
(垂直写真)



調査区東半部  
(北から)





第3地点全景  
(垂直写真)



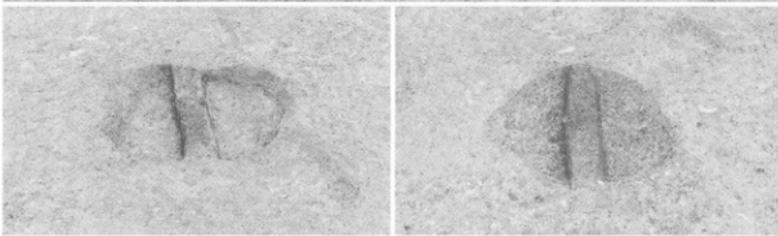
第3地点全景  
(南から)



第3地点A地区全景  
(北から)



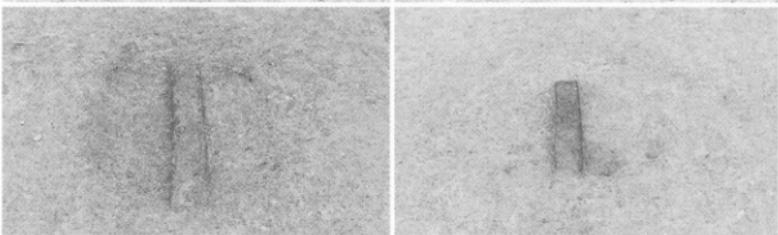
左) SK01  
(北から)  
右) SK02  
(南から)



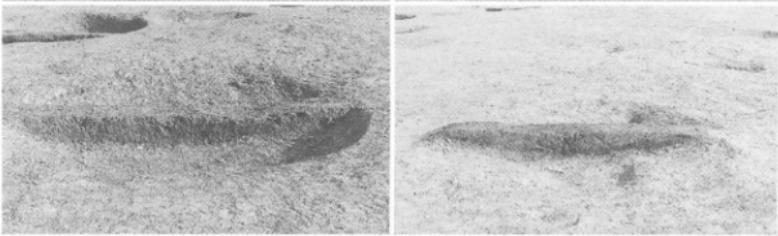
左) SK01 断面  
(西から)  
右) SK02 断面  
(西から)



左) SK03  
(北から)  
右) SK04  
(北から)



左) SK03  
(西から)  
右) SK04  
(西から)

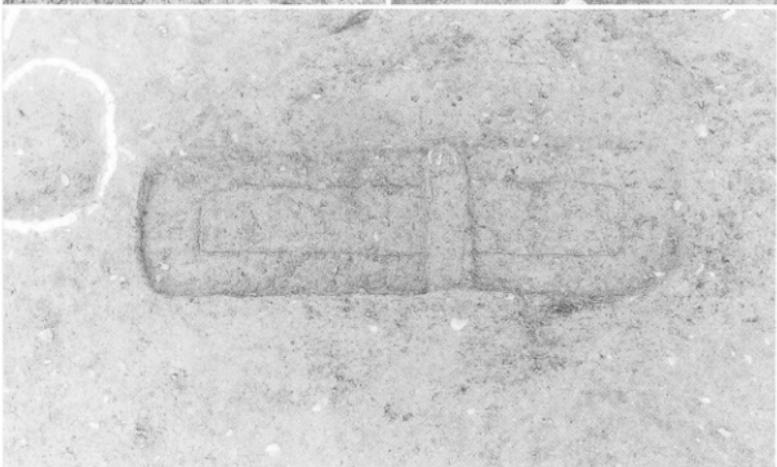




第3地点B地区全景  
(北から)



左) SX02 検出状況  
(北から)  
右) SX02 完掘状況  
(東から)



SX01 検出状況  
(南から)



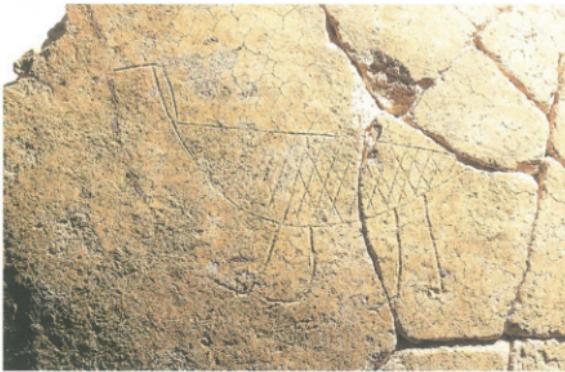
SX01 完掘状況  
(西から)



左) P02  
(南から)  
右) P01  
(南から)



SK03  
(北から)





1



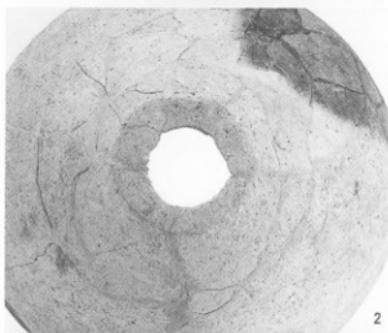
5



2



6



2



6





16



17



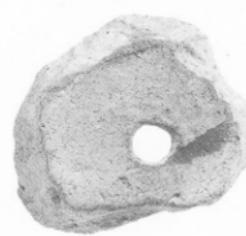
13



19



13



19



21



22



22



27



34



37



34



36



38



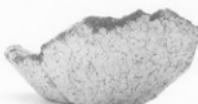
42



36



43



44



44



43



45



47



45



48



49



9



10



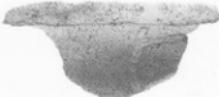
11



14



26



28



12



23



25



35



20



29



24



3



40



41



31



30



4



46



39



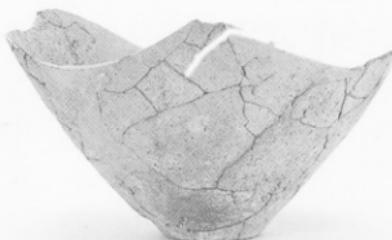
32



33



50



51



50



51



52



52



53



53



54



55

---

兵庫県文化財調査報告 第236冊

## 貝 谷 遺 蹤

山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXXVII

平成14年3月31日 発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目16-12

印 刷 ウニスカ印刷株式会社

〒677-0053 兵庫県西脇市和布町39

---